

それはおそらく、現在のように賑やかな儀礼が出来なかったということだと思われる。厳しい社会主義体制のなかで、たとえ禁止されていなくても竈神を祀ることは小さくなり、土公と習合され、祖先と一緒にまたは祭壇の香炉で祀られ儀礼が行なわれていたと考えられる。

以上のように、複合的な要因のなかで竈神は抽象化され、祖先の祭壇で「神霊」という名前の香炉で他の神々とともにまたは祖先とともに祀られるようになったと考えられる。

#### b) 北部地域の人々にとっての竈神

抽象化された竈神は、北部地域の人々にとって普段はあまりその存在が意識されていない。それは、竈神の祭壇が置かれている中南部地域との大きな違いである。竈神が抽象化されたことで人々にとって竈神は重要な神ではなくなったのだろうか。

竈神は、一年に一度、竈神儀礼のときに拝む神だからと日常は拝まない人たちや竈神は台所にも祖先の祭壇にもいないという人たちも、一年に一度のオンコン・オンタオの儀礼は他の地域に比べて盛大に行なっている。供物の数も燃やす紙銭や竈神の冠や靴などのマールも多い。この日常と儀礼の差について、タイホー村の西湖府周辺で売られていた竈神儀礼で使用する疏文から考えてみたい。ここに、下記のような興味深い一文が記述されている。

ひそ 窃かに恐るらくは、ほうい 方隅の禁忌、ある きゅうはん よ 咎犯に由って居處と 行 蔵 を通ること難き  
もつ まこと これ さ な ここ (ママ) いっさいのわざわい しずめと  
を以て、誠に吉凶は之を趨避くる莫きを。茲に節礼の禱祈もて一切之災殃を安解き、  
の 河沙之吉慶を 迂 令めんとするに逢たり。<sup>12</sup>

上記疏文の主旨は、恐れているのは方位の禁忌であり、かといって咎犯<sup>13</sup>のように居所と出処進退も悟ることが難しいので吉凶の事象を避けることができない。そのためオンコン・オンタオ儀礼のこのときに祈禱することで、一切の災いを解除し大きな吉慶を迎えることができる、というものである。

つまり、一年に一度オンコン・オンタオ儀礼で祈禱することですべての災いが解かれ、幸せや喜びが訪れるのである。ここに、人びとが一年に一度竈神を祈願すると話す理由が記されているのではないだろうか。これはフエ地域の疏文には記されていない。上記の内容を記した疏文が書かれた背景は現時点ではわからない。しかし、陰暦12月23日に竈神（と土公）を拝むことが非常に重要であり、また竈神（と土公）が強大な力を持った神であることがわかる。

そしてもう一つ重要なことは、竈神は祖先の祭壇の中央で祀られていることである。香炉の数は家により違いがあっても、他の神や祖先と一緒に祀られていてもほとんどの家で竈神は中央に置かれている。それは最近の変化の可能性もあるが、中央で祀るということは人々が竈神を重要な神として認識していることのあらわれだとみることができる。チャン・ゴック・テムの述べた五行思想からみると、中央に置かれた竈神（竈神を含む「神霊」）は、祖先と同等、また祖先よりも重要である。そして、タイビン省ミーアム集落でもハノイでも、中央の香炉から

<sup>12</sup> 原文：「窃恐方隅禁忌或由咎犯以難通居處行藏莫誠吉凶之趨避茲逢令節礼禱祈安解一切之災殃迺河沙之吉慶」

<sup>13</sup> 咎犯（きゅうはん）は、中国春秋時代の晋の政治家、狐偃の字。

拝んでいる。つまり、竈神がまず拝まれているのである。

また、人びとの意識とは別に竈神が拝まれている事例もある。一つの香炉で祖先や竈神、土公を祀り、日常は竈神を拝まないという家がある。しかし、毎月陰暦1日、15日に祭壇に向かって読み上げる祈祷文には、竈神の名前が載せられている。竈神を拝んでいるという意識がなくても、実際には毎月二回他の神や祖先とともに竈神も拝んでいるのである。

現在、北部地域では竈神の依り代や神牌はなく、他の神と一緒に「神霊」の香炉で祀られることが多いため、人びとからは日頃はその存在をあまり意識されなくなっているようにみえるが、実は非常に重要で強力な神として人びとの生活に関わっているのである。

### ③まとめ -北部地域の竈神の地域性-

北部地域の特徴である祖先の祭壇で竈神が祀られるのは、20世紀後半に入ってからであった。それ以前、1750年の資料では炉に置かれた土製支脚が竈神、神体は竈神の絵であった。20世紀後半まで土製支脚が神体であったことも明らかになった。フエ地域の特徴と思われていた木の下での竈神神像や土製支脚の見送り儀礼が、オジェ編纂の版画により、もとは北部地域の儀礼であった可能性がでてきた。

現在の竈神が祖先の祭壇で祀られる理由は、台所の変遷、北部の社会政策の影響、土公との混淆などの要因が混合されたと考えられる。

抽象化され、日常あまり重視されていないようにみえる竈神だが、実は祖先の祭壇の中央、最も高い地位に置かれ祀られている。土公と結びつき習合されたことで疏文にも記されたように、家族や家を保護する役割はより強大になったのである。そこには中国の信仰を取捨選択して取り入れ、自分たちの形に作り上げた北部地域の竈神の特徴をみることができる。竈神と土公が習合することで強大な神となり、家族を守護しているのである。

抽象化された竈神ではあるが、役割は大きくなり家族を守る重要な神として祀られていることが明らかになった。

## 第2節 中南部地域の竈神

ここでは中南部地域の竈神について述べていきたい。

### (1) 中南部地域の特徴 -中国系移民-

竈神としての中南部地域の区分は前述したとおりである。この地域の特徴をみていくうえで重要になるのが、中国系移民の影響である。

まず、中国系移民に関係する呼称について整理したい。三尾が使用する定義に従って、「中国系移民」とは、地政学的な意味で「中国」であった地域から出て行った人々をその子孫を含めて指す言葉（三尾 2006:87）として本研究でも用いる。

ベトナムでは、この中国系移民は、華僑、華人、明郷というカテゴリーに区分される。未成の資料も参照して整理をすると、「華僑」は中国籍を持ちベトナムに居住する人々。「華人」はベトナム国籍を取得しているが、自らを中国系であることを意識し、アイデンティティを持つ者、行政上、少数民族として分類される人々。そして「明郷」という集団がある。この明郷は多様な内容を持って使用されるので、一義的な定義が不可能な概念としながら、位置付けを整

理すると、1) 明の遺臣が広南阮氏のもとで明香社民となった者及びその子孫、2) 南部など一部で用いられる広義の用法として、中国系の血を一部でも引いている者(末成 2012c: 223-224)。三尾は、「明郷」を「明郷」籍を取得してベトナムに帰化したものとしている(三尾 2006:87)。

中南部地域に入った華僑や明郷についての研究は、陳荊和、藤原利一郎、竹田龍児をはじめとして多くある(藤原 1986、竹田 1975、小野 1999 他)。それらの資料をもとに、中南部地域の中国系移民の流れを簡単に述べたい。17 世紀後半、明朝滅亡に際してその遺臣たちおよそ三千人がツーラン(現ダナン)港に来航した。中部を支配していた広南王阮氏は、彼らを当時はまだカンボジア領であった後の嘉定地方(ミートーやビエンホア)に入植させた。そのことが南部地域の中国系移民の起源となる。彼らを嘉定地域の開発にあたらせたことにより、南部地域の華僑の発展の基礎が築かれた。

ホイアンの明郷を研究しているグエン・ティ・タイン・ハーによると、明末清初から 17 世紀末にかけて中国から脱出した明遺民は、永住目的でホイアンに来住した。その明遺民と現地女性の間で生まれた混血児たちは「明香(ミンフウオン)」と呼ばれ、ホイアンでは 1650 年頃までに「明香社」が形成された<sup>14</sup>(グエン・ティ・タイン・ハー 2017: 114)。この明香社は、1827 年阮王朝の中国系移民に対する政策により、「明郷社」と改称され、1842 年には中国系移民とベトナム人という一つのカテゴリーでベトナム人として認められ、「明郷」籍という区分がされた(グエン・ティ・タイン・ハー 2017: 114)。現在は「明郷」籍はなく、ベトナムのキン族としての国籍に組み込まれており、意識として明郷集団が残っている。

現在もフエやホイアン、ホーチミンのチョロンなどには広東、潮州、海南、福建などの名前の付いた会館が存在している。そのことから、中国系移民の中国での出身地の多くは広東省、福建省であるといえることができる。

## (2) 竈神を祀る儀礼の実態

以下に取り上げる事例は、出身地など家族の背景の異なるいくつかのケースである。①中部地域に在住、②出身は中部地域で現在はホーチミン市に在住、③中国系ベトナム人でベトナム人と結婚した女性、④ホーチミン郊外に在住、⑤南部メコンデルタ地域、⑥両親は中部地域出身で学生時代からホーチミン在住である。これらの事例は、調査を行ってきたなかの一例にすぎないが、中南部のある程度の竈神を祀る人々の実態と竈神の性格の特徴をみることでできるとと思われる。以下にその内容を記していく。

### ①事例からみる竈神を祀る実態

事例 1: グエン・ティ・タイン (Nguyễn Thị Thanh) 氏

出身: ニントアン省ファンラン市(中部地域)

タイン氏は 78 歳(2017 年)、女性、10 人の子どもはそれぞれ独立し、ファンラン市やホーチミン市に住む。現在は長男家族の家に住むが、数年前まで自宅であった建物は、1968 年に建てられた二階建て家屋である。その二階の一室に祭壇部屋があり、仏陀や祖先の祭壇とともに竈

<sup>14</sup> グエン・ティ・タイン・ハーは陳荊和の資料を参照している。筆者は未読であり、藤原による陳の資料の解説を参照している(藤原 1986:257-270)。

神の祭壇も置かれている。一階に台所はあるが祭壇はない。竈神の祭壇は、本来は台所に置くという考えはあるが、祭壇部屋で一緒に祀っていた。竈神の神牌には、真ん中に「灶君」の文字があり、両側に「有徳能扶宅主安」「無天可達於庭数」の文字が書かれている（写真 2-10）。神牌は 1968 年に家を建てた以前、長男であった夫の父の代からあるが、いつ頃のものはわからず、また文字の意味もわからないという。

竈神の祭壇には毎日、朝と夜に水と線香を供え、陰暦 1 日 15 日には水と線香と果物を供える。送神儀礼の供物は、水・線香・花・果物・マー（竈神の紙の服や紙銭）、鶏があれば供えるが、どちらでもよい。陰暦 12 月 23 日の 0 時、日付が変わると、すぐに線香 3 本に火をつけ、祈禱文を読み上げ家族の幸せを祈願する。線香が全部燃え終わると、最後にマーを燃やす。マーを燃やすことで竈神は天に行くことができる。タイン氏によると、竈神は家族を守る神であるが、最も大切な神は仏陀（観音）であり、2 番目が竈神、3 番目が祖先だという。部屋には、観音を祀った大きな祭壇が置かれている。

タイン氏は以前、土製支脚を使用していた。いつまで使用していたかは覚えていないが、土製支脚を使用していたときは、送神儀礼のときに古い土製支脚を木の下に捨てていたという。



写真 2-10 グエン・ティ・タイン氏  
竈神の祭壇

（聞き取り 2008 年 8 月と 2009 年 9 月）

事例 2：グエン・ティ・ホアン・サー（Nguyễn Thị Hoàng Sa）出身：ホーチミン市

サー氏 34 歳（2018 年）女性、2013 年に結婚し、現在は夫と息子一人の 3 人でホーチミン市に暮らしている。両親はダナン市出身で 1990 年からホーチミン市に在住している。サー氏の家も両親の家も台所に竈神の祭壇があり、「定福灶君」の神牌が置かれている。両親の家の竈神について、ここで記していきたい。

竈神の役割は、家の火が消えないように守ることである。その理由は、火があるということはお金があり食物が買えて料理が作れるからである。竈神は、家族を和やかにして、喧嘩がないようにする神でもある。そして家を建てたときなどは、他の神よりも先に竈神を祀り、その場所（方位）は、家主の生まれ年によって決まるという。現在、サー氏の家も両親の家も台所のガスコンロの置かれた場所の壁の上部に祭壇が作られている。

毎日、竈神に三柱分のお茶とお水、そして線香を供えている。特に家族に何かあるとき、例えば子どもの学校の試験や発表、病気などのときには、竈神に祈願する。

送神儀礼では、台所などを掃除してから供物や料理の準備を始める。供物は、果物、鶏（もも肉）、水、茶、酒である。竈神への祈願は、前日に近所の寺に行き、住職から祈禱の言葉を教えてもらい、当日は家主である父親が祈禱文を唱える。観察者である竈神は天に上がり家族のことを報告するため、父親は家族の仕事や学業、健康についてお願いをする。竈神を祀るのは基本的には一家の主だが、女性が行なっても問題はない。祈願が終わると、マーを燃やして終了となる。竈神への供えものを祭壇から降ろし、夜に家族みんなで共食する。

天に上がった竈神は、大晦日 12 月 30 日に家に戻ってくる。そのときは、「今日は 30 日です。



竈神を迎えて家族と一緒にご飯を食べましょう」と伝えるという。また、竈神が不在の一週間は、テトの準備に集中するため、料理はあまり作らずガスコンロもほとんど使用しない。

ガスコンロを使用する以前は五徳を使用しており、そのときは五徳の三つの足が竈神三柱を表していたという。

また、サー氏の家には竈神の祭壇が置かれているだけだが、両親の家には家族や客が集う居間に財神と土地神が祀られ、2階の両親の部屋には仏陀と観音を祀る祭壇がある。

(聞き取り 2008年8月、2009年1月、2010年1月)

### 事例3：リュウ・ゴック・ビック (Luu Ngọc Bích) 氏

ホーチミン市チョロンの家の竈神

ビック氏(女性)は、中国系ベトナム人で、夫はベトナム人である。普段は夫とカンボジア国境に近い南部メコンデルタ地域のアンザン (An Giang) 省チャウドック (Châu Đốc) で暮らしている。5区のチョロン (中国人街) にある集合団地の一室は、娘がホーチミンの大学に通っていたため、またビック氏が頻繁にホーチミン市に出ることがあるために購入した。今は、ビック氏がホーチミン市に来るときに使用している。

家は一階と二階に分れ、台所は一階の奥に作られている。竈神の祭壇は一階の台所のガスコンロの上に置かれている。祭壇には「定福灶君」の神牌と香炉、花瓶、果物をのせる皿、小さいカップ三つが置かれている。

送神儀礼の供物は、ぜんざい・おこわ・果物であり、肉は供えない。肉を供えない理由は、竈神は菜食であるからだという。そして、肉は財神に供える供物だという。ビック氏によれば、南部地域のベトナムにおける竈神の儀礼は、中国人もベトナム人もチョロン地区もチャウドックも祭祀や供物に違いはないという。



写真 2-11 リュウ・ゴック・ビック氏  
竈神の祭壇

(聞き取り 2008年8月)

### 事例4：フィン・クワン・トゥアン (Huỳnh Quang Thuận) 氏

出身：ホーチミン市ビンチャン

フィン・クワン・トゥアン氏は、1935年生まれ81歳(数え年)、男性。トゥアン氏の家には、調理をする場所が屋内と屋外にある。屋内にはガスコンロが置かれ、その上部に竈神の祭壇が設置されている。木製の箱型の祭壇には



写真 2-12 フィン・クワン・トゥアン氏  
屋外の炉 レンガの竈と南部地域の特徴的な土製移動式焜炉

「定福灶君」の神牌と香炉、花瓶、コップ三つが置かれている。屋外には炉が作られている。そこには、レンガを積み上げて作った竈や南部地域の特徴的な土製の移動式焜炉が置かれている（写真 2-12）。屋外の炉では、テトの準備や命日など儀礼で大量の料理を作るときに使われる。

トゥアン氏は土製支脚について、いつまでかは覚えていないが、昔はみんな自分の家で土製支脚を作っていたという。そして、土製支脚を作っていたときには、竈神の送神儀礼のときに、古いものを木の下に置いて交換をしていた。

儀礼に供える供物は、果物・おこわ・ぜんざいである。肉は、財神に供えるため竈神には供えない。また、竈神が天に上るときの乗り物は（読んだ本によると）鯉であり、鯉が龍になって天に行くと考えてはいるが、実際には鯉は供えていない。

屋内には祖先の祭壇の側の地面の上に、財神と土地神が祀られ、広い屋外にはアムが建てられ、上の台と下に香炉が置かれている（写真 2-13）。その上の台で祀られているのは天（*ông trời*）である。



写真 2-13 庭に置かれたアム

（聞き取り 2010 年 1 月、2012 年 8 月）

#### 事例 5：グエン・ヴァン・トゥ（*Nguyễn Văn Tú*）氏

出身：ティエンザン省カイベール県（*Huyện Cái Bè tỉnh Tiền Giang*）（メコンデルタ地域）

トゥ氏は 86 歳（2014 年）、男性。子どもは 7 人おり、全員カイベールに住んでいる。仕事は農業であり、広い敷地で米や野菜、果物を生産している。

家のなかにガスコンロが置かれているが、外の小屋のなかにも土製焜炉が二つ置かれ、どちらも使用されている。竈神の祭壇は、家のなかにある台所の壁の上部に作られている。現在、神牌は置かれていないが、以前はあったという。竈神は、家族にとって最も重要な神であり、台所のことと家族のことを守る神である。

竈神の儀礼では、ぜんざい、果物、甘いお菓子を供える。鶏は供えない。昔は鯉を供えて放生していたが、今は紙の鯉（マー）を供えている。30 日に竈神は家に戻り、その日には祖先と財神も戻ってくる。以前の台所は、屋外に独立して付属屋が建てられていた。そして、1970 年頃までは自分たちで土を捏ねて土製支脚（三つの竈神 3 *ông Táo bằng đất*）を作り、その付属屋で使用していた。しかし、自分たちで土製支脚を作っていたときも儀礼の日に新旧の交換をすることはなかった。

竈神以外には、財神と土地神（オンディア翁地 *ông Địa*）が屋内で祀られている。

（聞き取り 2016 年 1 月）

#### 事例 6：ファン・タイン・スエン（*Phan Thanh Xuyên*）

スエン氏は 38 歳（2018 年）、女性。大学時代からホーチミン市に住み 2009 年結婚、夫と 2 人の息子の 4 人暮らし。夫も同じニントアン省ファンラン市出身である。母は事例 1 のタイン氏である。2016 年から現在の家に住むが竈神の祭壇は置かれてない。しかし、竈神は台所にいるため、お願いしたいことがあるときは台所で祈願する。また、送神儀礼や大晦日に家に迎え



る儀礼も行なっている。

12月23日0時を過ぎてすぐに儀礼が出来るように、あらかじめ供物の準備をする。供物は簡単であるという。線香、チャー（chè ぜんざいのようなもの）、甘いお菓子（kẹo thèo lèo）、果物、花、水。肉は供えない（写真 2-14）。0時を過ぎると、線香に火をつけ竈神に祈願し、最後にマーを燃やす。マーを燃やすための小さな容器が庭に置かれている。



写真 2-14 スェン氏の竈神の供物

スェン氏によると、竈神の儀礼も大事だが、1年最後の儀礼（lễ cúng cuối năm）も大事だという。祖先を迎える大晦日の儀礼（giao thừa）とは別のものであり、屋内や屋外の敷地の土地に対する儀礼である。1年間の悪いものを追い出し、新年に良いものが来ることを祈願する。自分の両親はこの儀礼をしていなかったが、スェン氏は自分の家族を持ち新しい家を購入したことで、これは重要な儀礼であると考えて行うようになったという。この年末の儀礼での供物は、花、果物、鶏（雄）とご飯、牛肉料理、香炉、などである。竈神のときの供物とはかなり異なり盛大である（写真 2-15）。また、前の家の所有者が行っていた孤魂への儀礼（cúng cô hồn）も引き継いでおり、1ヶ月に2回、陰暦2日と16日に門の外で行なっている。



写真 2-15 1年最後の儀礼

（聞き取り 2008年8月、2009年1月、2015年12月、2016年6月、2018年2月）

その他の事例として、両親がカントー出身でキリスト教徒として育った60代の女性の話を少し記しておきたい。その女性の家に竈神の祭壇はなく、日常的には家のキリストの祭壇と週末に教会に行き、礼拝している。しかし、竈神は信じているという。竈神の儀礼の日には、供物も用意して台所で祀り、竈神に家族のこと今年の出来事を報告し、来年のことを祈願する。彼女によると、竈神は昔からベトナムの人々が信じてきた大事な神であり、自分たちの祖父母もそうやってきたのを見てきた。竈神の儀礼はベトナムの文化であり習慣なので大切だという。

以上、六つの事例とキリスト教徒の女性の話を取り上げた。ここに記した以外にこれまで行ってきた調査をみても、中南部地域では竈神の祀り方などに地域やベトナム人とチョロンに住む中国人とのあいだでの大きな差はみられない。台所に祭壇が作られ、「定福灶君」または「灶君」の神牌を置いて祀るのが一般的にみられる。たとえ祭壇がなくても、台所で竈神を祀り儀礼をしている。祭壇の有無にかかわらず、陰暦の朔望に線香や供物を供えたり、家族に何かあると竈神に祈願したり報告したりと、竈神は非常に身近な存在である。

また、財神や土地神が屋内に祀られていれも、竈神の役割や存在が影響を受けている様子は調査からはみられなかった。中南部地域の人にとって竈神は家族を守護する重要な神であり、人々は三柱の竈神を信仰している。

竈神の儀礼は、供物もマーもシンプルである。鶏などを供えない家も多い。なぜ財神には鶏



を供え、竈神に供えないのかは聞き取りからはわからなかった。中南部地域の特徴の一つは、竈神儀礼で用いるマーである。次に、そのマーのセットについて述べていきたい。

②陰暦 12 月 23 日竈神儀礼の祭具：マー

ここでは、中南部地域の竈神儀礼で用いられるマーについて述べておきたい。北部地域では立体的な靴や帽子と大量の紙銭が特徴的であり、フエ地域では次章で述べるが竈神版画とわずかな紙銭である。そして、中南部地域のマーの特徴は、非常に中国の影響がみられることである。以下にそのマーについて詳しくみていく。

ホーチミン市の市場では、23 日見送り用と 30 日迎え用がそれぞれセットとして売られている。中身は同じものであり、セットになった袋に、竈神の見送り 23 (Đưa Táo 23) または竈神の迎え 30 (Đón Táo 30) と書かれて区別されているだけである。

その中身は、蠟燭 3 本。竈神の服：中央に竈神一柱（男性）、左右に対句が描かれ、2 人の従臣も描かれているものが 1 枚。竈神が天に昇るための馬と鷲が描かれた絵が 3 枚。そこには、「cò bay ngựa chạy」(鷲は空を飛び馬は駆ける) と書かれている。また、金銀紙・紙銭、竈神経の一部が記された紙がそれぞれ 3 枚ずつ収められている(写真 2-16)。竈神経の一部が記されたなかに、大中国広東の文字がみえる。広東省で作られたもの、または原本をもとに中南部地域で印刷されて流通していることがわかる。ホイアンの市場でもホーチミンのものと同様のものがセットになっている。異なるのは、シン村で作られた三柱の竈神版画が同封されていることである。ホイアンがフエ地域に近いことがその理由であると思われる。

このマーセットの中身は、中国の竈神に用いるものであることは明らかである。しかし、興味深いのは、竈神三柱用にほとんどのものが三つずつ入れられていることである。

(3) 南部地域の亭で祀られる竈神

①南部地域の亭の特徴

亭(ディン)は、北部と中南部、そして南部では建築や祀られる神などが異なる。亭について註で少し述べたが、ここでもう一度、簡単に整理したい。北部地域の亭は、城隍神が村落の守護神として祀られ、村の集会所も兼ねた春の村祭りなども行なわれる信仰施設である。この北部地域の城隍神は、歴史的な人物や自然界の驚異的な存在など多様である。中南部地域では、一般的に村の始祖が開耕神として祀られている。しかし南部地域の亭は他の地域と異なる点がある。その特色について、フィン・ゴック・チャンほかにより記された内容を以下にあげておく。

南部地域の亭で祀られる神は、城隍神や福神、神霊、地域の名士など非常に多く複雑である。



写真 2-16 ホーチミン市の市場で購入  
マーセット(上) 右下の資料拡大(下)

その神々は二つのグループに分けることができ、一つは古い故郷から開拓に従事した人々による福神と城隍神である。特に水路を使い開拓した人々は、どの亭や廟でも村の人が海に出るのを保護する神として祀らなければならない。これらの神は主人 (người chủ) と呼び、中部地域の特色が持ち込まれたものだろう。二つ目は民間信仰による神霊であり、土公(土神)、五行、白馬太監など、村によって農業村では社稷、雨師、漁村では南海將軍などを祀る (Huỳnh Ngọc Trảng, Trương Ngọc Tường, Hồ Tường 1993 : 35-36, 45)。そのなかに竈神が含まれている。また、フィン・ゴック・チャンは、亭で祀られる竈神について料理や薪木の火の世話をする神で亭の後ろの建物、厨房の近くで祀られ、祭壇には「灶君」「定福灶君」「東厨司命」と書かれ、毎年見送りと迎えの儀礼をすると記している (Huỳnh Ngọc Trảng, Trương Ngọc Tường, Hồ Tường 1993 : 70)。

亭が北部地域と中南部地域で異なることは、さまざまな資料で指摘されている。しかし、特徴の差異を詳しく言及し、特に南部の亭について研究したものは非常に少ない。本研究においても南部の亭を掘り下げて言及することは、資料や調査が不十分なため難しく、ここでは、ホー・トゥオンがホーチミン市の亭で祀られる神を調査し、作成した一覧 (Hồ Tường 2005) をもとに、竈神が祀られている亭の実際の様子を提示したい。亭ごとに祀られる神を記した表には、竈神が祀られる亭は多くない。そのなかでも現在も竈神が祀られている亭について調査を行なった。以下にどのように竈神が祀られているか述べていく<sup>15</sup>。

## ②亭で祀られる竈神

亭で竈神が祀られていることが確認できたのは、ホーチミン市の二つの亭、ビンズウオン省の二つの亭である。そのなかで話が開けたのは一箇所だけであったが、竈神を祀ることについてはわからなかった。そのため、ここでは資料提供に留めたい。

### ・安富亭 (Đình An Phú)

ホーチミン市2区にある亭である。中央の奥で祀られる神に名前は記されていない。手前には「金皇帝 (Kim Hoàng đế)」とある。左右にそれぞれ神の名前が記され祀られている。竈神は、左班と掲げられた側の壁に、神の名称が一覧に乗せられている。前賢から3番目に「東厨司命」とある (写真 2-17)。対面の右班には、神一覧として、「後賢、九天玄女、田祖、田父、田母」などが記されている。亭の敷地内には五行廟も建てられている。



写真 2-17 安富亭の竈神

ここでは亭のなかを見せてもらうことは出来たが、説明できる人がいなく話を聞くことができなかった。

### ・富潤亭 (Đình Phú Nhuận)

ホーチミン市フーニャン区にある亭は、最初に建てられたのは19世紀の初めだといわれて

<sup>15</sup> ホーチミン市の亭の調査は2012年9月、ビンズウオンの亭の調査は2016年に行った。



おり、1852年嗣徳帝5年に勅封が残されている。亭の内部、一番奥の正殿には「神」の一文字が記されている。竈神は左側の壁、左班列位の隣に大きく「東厨司命」と記された神牌が祀られている（写真 2-18）。その下に小さな神牌「恭請東厨司命灶君之位」と竈神の冠が置かれている。対面には、「福德正神」が祀られている。この亭は1997年に国家歴史文化遺跡に指定され、管理者は配属されて富潤亭に来ている。そのため詳しいことはわからないという。しかし、フーニウァン区の人々が来ることはないが毎年陰暦12月23日と30日には亭で竈神の儀礼をしている。その際に読み上げる祈祷文が以下のものである。



写真 2-18 富潤亭の竈神

富潤亭にあるのはベトナム語で書かれた祈祷文のため、漢字に置き換えたものを右に記した。その際に、ベトナム語への誤記とみられる単語に対しては、正しい漢字を記し、カッコ [] 内にベトナム語直訳の漢字を記してある<sup>16</sup>。

#### Cúng Táo quân

Nam Mô A Di Đà Phật (3lần)	南無阿弥陀仏 (3回)
Táo Quân chơn Kinh (3lần)	灶君真經 (3回)
Táo Quân nhất gia chi chủ	灶君一家之主
Ngũ Tựa chi Thần	五序之神
Chư Hầu thiết hư Bát Đẩu	諸侯実虚不斗
Xác Thiệt ác ư Đông Trừ	確實握 [悪] 於東厨 [除]
Giáng Phước trừ Tây	降福除災 [西]
Di hôn quá Kiệt	遺恨 [昏] 過結
An Trấn âm dương	安鎮陰陽
Bảo hộ gia Trạch	保護家宅
Hà Tay Bất giảm	何災 [河西] 不減
Hà Phước Bất Tăng	何 [河] 福不增
Hữu Hầu Vai Ứng Cảm Ứng chứng minh	有侯解 [口] 応感応証明
Nam Mô A Di Đà Phật	南無阿弥陀仏

この祈祷文がどのような経緯で富潤亭に伝わったのか定かではない。大西氏と Chu Xuân Giao 氏によると、中国語の訛りが影響し、誤記が多くなったようである。おそらくホーチミン市在住の華人が書いたベトナム語であろうとのことである。在地の華人が、ベトナム人が使用できるように翻訳していたということに、ホーチミンにおける華人とベトナム人の関係性が示唆されているように思われる。この祈祷文も「南無阿弥陀仏」で締めくくられている。

<sup>16</sup> 2018年8月大西和彦氏と Chu Xuân Giao 氏のご教示による。

#### ・己安神亭 (Đình thần Dĩ An)

ビンズオン省ディーアン市にある亭。ビンズオンの新聞によると、古くは己安故廟と呼ばれており、1838年ごろ、村で生活する人が増えたので廟を立て直し、その際に己安神亭としたとある。そののちの1852年に嗣徳帝より亭の城隍に勅が封じられ、2011年には国家歴史文化遺跡に指定された<sup>17</sup>。

この亭の竈神は、建物の外、前庭の左側に建てられた祠のなかに、「五方五土」と並んで左側(内から外を見て)祀られている。中央に「灶君住宅」、左右に「右：有徳能司三昧火、左：無私可達九重天」と記されている。

もう一つビンズオン省の亭で祀られている竈神がある。嗣徳5年(1852)に、福正県新葩村の城隍神に勅が授与されたとあるが、亭の名前は不明である<sup>18</sup>。建物のなかの左側(内から見て)の高い位置で祀られている。中央に「灶君」、右：百味塩居首、左：萬？物米為□とあり、下にも文字があるがみえない。左右の文字は初めて目にする内容である。隣の人形も不明だが、もしかすると竈神かもしれない。

亭で祀られる竈神を4か所とりあげた。北部地域の亭でも竈神が祀られていたという資料はあるものの現在は祀られていないため確認はできないが、亭の機能の違いから考えても、おそらく竈神が祀られるのは、南部地域で広く展開された亭の特徴といえるだろう。南部地域の亭で祀られる竈神に共通しているのは、東側または本殿や中央の「神」からみて左側に置かれていることである。この竈神に中国系移民の影響があることは確かであり、「東厨司命」と記される「東」に関係があると考えられるが、未詳である。また、3か所の亭では、すべて1852年に勅封を受けている。それらのことや竈神以外の神との関連などもあわせて、今後調べていきたい。

#### (4) 中国系移民の影響による竈神を祀る儀礼

ここでは、中南部地域の竈神を祀る儀礼の特徴について、祭具と人々の竈神に対する観念から述べ、最後に南部地域の特異な地域性について触れておきたい。

##### ①物質文化研究からみた祭具マーセットと中国の影響

中南部地域の竈神をみると、祭壇に置かれた「定福灶君」の神牌と竈神の儀礼で用いられるマーのセットは、中国の竈神の影響であることが明らかである。歴史的にみても現在においても、北部地域ではこれらの祭具は用いられていない。そのことから考えて、北部地域から伝えられた竈神ではなく、17世紀末明末清初に中国の福建省や広東省から移民した人たちの影響であるといってお間違いはないであろう。特にマーのセットのなかには、明らかに広東の文字が記されたものもある。フィン・ゴック・チャンは、南部の竈神は19世紀初めまで北・中部の伝統的な三柱の竈神を祀る習慣が維持されてきたが、20世紀初めに再び中国の竈神が人々の間に受け入れられ、特に「灶君真経」の翻訳が刊行されると普遍になり、竈神の儀礼で用いる版画は中国の竈神、「灶君真経」に準じて中央に竈神、左右に部下を従えていると述べている (Huỳnh Ngọc Trảng và Nguyễn Đại Phúc 2013 : 50-55)。確かに、中南部地域の祭具に中国の影響

<sup>17</sup>ビンズオン新聞 <http://baobinhduong.vn/dinh-than-di-an-ban-sac-va-gia-tri-a135023.html> 最終閲覧 2018/06/30

<sup>18</sup> チャン・ヴァン・クイン (Trần Văn Quyển) 氏から頂いた資料である。

が強くみられる。しかし、祭具の影響と人々の竈神への観念の関係はどうであろうか。

屋内の台所空間に作られた祭壇に「定福灶君」の神牌が置かれていても、人々にとっては男神二柱・女神一柱の三柱のベトナムの竈神を現在も信仰している。それは、たとえ中国の竈神が描かれた絵が入っていても、マーのセットに三柱用に三セットずつ用意され袋に入れられていることから明らかである。中国製（おそらく広東製）の「物」を利用しながらも、そこに手を加えて自分たちの信仰にあわせて活用している。そして人々は、中国の竈神が描かれていることには特に意識していない。だからこそ違和感や抵抗感なくそれらをベトナムの三柱の竈神の儀礼に用いているのである。日本の民俗学的な視点として有形の「物」と無形・不可視的な「もの」を併せた「モノ」としての全体的な視点（佐野 2002:1-7）から、中南部地域の祭具マーセットをみると以下のようにいうことができる。

竈神を祀る祭具は、商品の流通として中国で竈神を祀るのに用いる神牌やマーの影響を受けているが、その「物」にはベトナムの竈神三柱という「もの」に対する信仰が込められている。そこには、中国の竈神を信仰そのままに受け入れるのではなく、ベトナムの三柱の竈神を祀るために活用する姿をみることができる。中南部地域の人々にとって、「定福灶君」の神牌も広東の文字の入ったマーも自分たちの三柱の竈神を祀るための「モノ」であるといえるだろう。

## ②中南部地域における竈神

調査を行った地域では、どの家庭も竈神に求めるものは、家族の健康や平安、発展であり、ベトナム全土で特に違いはみられない。1年に1度の儀礼や朔望だけでなく、日常的にも家族の日々の出来事に対して竈神に祈願し報告する。普段は教会に通う60代のキリスト教徒の女性が語った、竈神は昔々からベトナムの人々が信じてきた大事な神であり、キリスト教徒でも竈神を祀ることはベトナムの習慣である。祖父母がしてきたことをみていたから自分も行うという言葉から、三柱の竈神が広範なベトナム人の信仰となっていることに思い至る。

第1章でも述べた、フィン・ゴック・チャンが記した経済発展という変化のなかで竈神から財神（土地神）へと人々が祀る家の神の重要さが変わってきた（Huỳnh Ngọc Trảng ほか 1994:27-29）という状況は、今回の調査をとおしてみることはなかった。商売をしている家や店では財神や土地神を祀るのは一般的であり、一般の家でも多くはないが祀られている。だが、たとえ財神と土地神が祀られていても、それらの神は中南部では竈神との役割区分が明確にされており、供物の違いにもあらわれている。竈神は家族を守る重要な神として、その存在は維持されていることが実態調査から明らかになった。

## ③南部地域の特異性と竈神

最後に、南部地域の影響として中国系移民だけでなくクメール人の文化も考える必要があるため、簡単に記しておきたい。筆者はクメールや中国の人々が生活する地域での調査が未見であり、ベトナム人・中国系移民・クメール人が居住するソクチャン省 D村をフィールドにしている中西裕二の資料に依って述べておく。

中西によれば、もともとクメール人の居住域であったところにベトナムの南進により19世紀以降にキン族と華人が流入し、三つの民族が雑居する現在の姿になったという。そのD村でも竈神が祀られている。オンタオと呼ばれる女性1人男性2人の三柱の神であり、台所に作られた祭壇には神牌はなく香炉が置かれるのみである。屋内ではほかに、祖先の祭壇や土地財神な

どが祀られている。しかし、祖先や土地財神などが祀られるのは家により違いがあるが、竈神は共通して祀られると述べている。上座部仏教を信仰しているクメール人は元来、竈神や祖先の祭壇などを祀る必要もその習慣もなく、また自らを華人、キン族、クメール人とみなす世帯、混血の世帯における祭祀は多様であるにも関わらず、どの世帯でもほぼ共通した祭祀対象は竈神である（中西 1999:91-116）。このような地域においても中国の一柱の竈神ではなく、三柱のベトナムの竈神が広く各家庭で祀られていることは非常に興味深い。

もう一つ、南部地域における土地神について触れておきたい。末成がフィン・ゴック・チャンに依りながら南部の土地神の特徴を述べているため、それを参照しながら述べていく。南部で祀られる主愚魔娘は、混在した文化の性質を持つ。もともとは中部でチャム族の女神信仰の系譜を引くが、前主（その土地の先住者の亡魂、魔鬼）を祀る風習が中部から南部に伝わるなかで、クメール起源の土地神であるオンター（ター翁 Ông Tà、ネアク・ター Neak Tà）と同一視されたりもした。その後、華人の影響によりオンディア（翁地 Ông Địa）を祀る風習が南部地域で普遍的になるとオンディアとオンター（主愚魔娘）のあいだに分業が起こり、オンターは田畑を保護する神となり、オンディアは家を保護する神となった。そして、20世はじめにオンターの祭礼は、むらレベルから家庭レベルで行なわれるようになり、オンターと分化した主愚魔娘は土主（Thổ chủ）とよばれる土地の主となり、庭園の片隅で小さく簡易な廟のなかで祀られるようになった。このことは、オンディアを祀る風習が主愚信仰に影響を与えたことを明らかにしている（Huỳnh Ngọc Trảng ほか 1994:19-22、末成 2000:80-82、2005:176-178）。

ここで南部地域の土地神を取り上げた理由は、ベトナム・キン族にとって土地とかかわる神は、その土地で生活するうえで非常に重要な神と位置付けているからである。上記の南部地域で祀られる土地神の変遷をみていくと、ベトナムの南進政策により中部では土地を征服したチャム族の女神の信仰を取り入れて、自分たちを守護する神としている。そしてその神を持ち込んだ南部では、土着のクメールの神を融合している。そして最終的には、オンディアという中国系移民の土地神の影響も加えた非常に包摂された土地神でもって自分たちを保護しているのである。

南部地域の土地神の形成からベトナムの人々の信仰に対する観念をみていくと、積極的に他の民族の文化や信仰の要素を取り入れながら自分たちの信仰として形作っていることがわかる。この土地に関連する神と三柱を祀る竈神がベトナム・キン族の人々にとってどのような存在であるかについては最後に考えたい。

### 第3節 中部ホイアン旧市街の竈神を祀る儀礼の実態

#### (1) ホイアンの概況

クアンナム省ホイアン市は、中部の特別市ダナンから南方約 30km に位置する。中部山地の最高峰であるゴックリン（Ngọc Linh, 2598m）山を水源とするトゥーボン（Thu Bồn）川が町の南を流れ、旧市街から 5 km ほどの河口クアダイ（Cửa Đại）にそそぐ。ホイアン市は、河口部左岸にひらけた港町である（菊池 2002:7）。

ホイアンの歴史は、初期金属器時代のサーフィン文化まで遡ることができる。2世紀から15世紀ごろまで中部ベトナム一帯を支配していたチャンパ王国の聖地ミーソン遺跡群や都城跡チャキウ遺跡が現在も残されている（菊池 2002:10）。ホイアンは、チャンパ王国の時代から貿易

港として栄え、特に 16 世紀以降、ヨーロッパの商人の東南アジア進出により注目されるようになる。17 世紀初頭には生糸や砂糖、香木を求めて多くの日本人の貿易商がホイアンを訪れ日本町も作られた。しかし、江戸幕府の鎖国政策により日本町は衰退していく。その後、ホイアンの繁栄を支えたのは中国系移民であり、ホイアンにおける中国系移民の増加は、1644 年の明の滅亡前後に始まると考えられている（三尾 2006: 88）。

現在の旧市街に残る町並みは、19 世紀初頭以降に造られた木造町家群や 20 世紀初頭に造られた洋風建物群が残り（菊池 2002: 10）、1985 年にベトナム政府により国の重要文化財に指定された。1999 年には、ホイアンの旧市街はユネスコの世界遺産に登録されている。

## （2）旧市街の家屋と竈について

旧市街には、ホイアンでしかみることのない竈がある。ベトナムの竈は、第 1 章で述べたように土製支脚や土製焔炉、五徳が使用され、造り付け竈は一般的には家庭の煮炊きには用いられていなかった。しかし、ホイアン旧市街には独自の造り付けの竈が使用されてきた。

ホイアンの昔の竈を調査したチャン・ティ・レ・スアンによると、この竈は 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて作られた旧市街特有のものであり、ホイアンが交易の重要な場であったことが竈の形態にも影響している。現在、旧市街には九つの竈が残されており、そのうち四つはまだ家族の生活のなかで使用されているという（Trần Thị Lệ Xuân 2010）。

この竈は、筆者の聞き取りでは、石灰・漆喰・サトウキビの蜜を使って作られており、熱に強いという。竈の大きさは家によって異なるが、ほぼ三つ口または四つ口の竈であり、その竈の口には鉄が並行してまたは 3ヶ所に埋め込まれており、小さい鍋などを置く場合の支えであると思われる。

チャン・ティ・レ・スアンの報告を続けると、台所の機能は昔から料理をするための場所だけでなく、どの家も 1 日の労働のあとで家族が穏やかに集まる場所でもあった。台所は家の最も重要な要素の一つであるため、その位置には非常に気を使っていた。民間によると竈は常に西方を向くように、左（東側）に置かれる。または南か正西でそれ以外の方位は、全てよくない。祭壇については、竈の上部で竈神を祀るが、もし十分に祀る場所がなければ、台所の南側の角に置く。その理由は、竈神は火に属するため南に置く必要があると記している（Trần Thị Lệ Xuân 2010）。火と関係する方位、また竈神と火がどのように関係するかについての説明はない。次にホイアン旧市街の民家で祀られる竈神の実態と人々の竈神に対する観念をみていきたい。

## （3）竈神を祀る儀礼の実態

調査期間は、2011 年 8 月、2012 年 8 月、2013 年 6 月、合計約 10 日間、ホイアン遺跡保存センターの紹介により、旧市街にある古い竈を残す伝統的民家を対象に調査を行なった。ここではそのなかから五つの事例を取り上げる。

### 事例① 書法（トゥ・ファップ Thư Pháp）邸

土産物屋を営み、店にはベトナムや中国の書が置かれている。家屋の奥に昔の竈がある。四つ口の作り付け竈は、家主によると 1975 年まで実際に使用していたという。現在、調理にはオイル焔炉を使用し、古い竈は祭壇として竈神を祀っている（写真 2-19）。

古い竈と祭壇は、東側に西を向いて置かれている。家主によると、竈と祭壇は東側と決めら



れているが、理由はわからないという。祭壇には、家主が自分で赤い紙に「定福灶君」と書いて額に入れた神牌と香炉、燭台二つ、花瓶がある。竈神の禁忌として、祭壇の前の空間には不浄なものを置いてはいけないという。

竈神を天に見送る儀礼では、果物・花・甘いお菓子を供えて、家族の平安を祈る。竈神は優しい神で、特に子どもが病気になったときに線香をあげると治るといふ。

#### 事例② チャン・ティ (Trang Thy) 邸

108歳になる女性 (2013年当時) が暮らしている。世話をしている女性によると、祖先は中国人で、現在は息子が家主となっているが、別の地域に住んでいるとのことである。

竈は、家屋の1番奥にある。作り付けの三つ口竈があり左側には少し低い竈があるが、どちらの竈も現在は使用していない。低い竈の上部に竈神の祭壇が作られている (写真 2-20)。竈と祭壇は東側に西を向いて置かれている。赤く塗られた祭壇に赤い木の板に金色の文字で「東厨 定福灶君」と書かれた神牌、香炉一つ、燭台二つ、小さなカップが三つ置かれている。現在は竈の手前にある空間の通路脇に置かれたガスコンロを煮炊きに使用しているが、そこに竈神は祀られていない。

竈神を祀るのは、世話をしている女性が陰暦1日と15日に線香と果物を供え、竈神の儀礼でも供物は、果物と紙銭や竈神の服などのマーを供えている。竈の上に置かれた祭壇で儀礼を行い、マーは最後に燃やすという。

#### 事例③ 安順 (アン・ズン An Dung) 邸

家主 タイ・ティエン・ゴン (Thái Thiện Ngòn) 氏、57歳 (2013年当時)。家の前家の部分は土産物屋になっているが、場所を貸しているだけで経営はしていない。現在、ゴン氏は別の地域に住んでいる。家屋は100年程前に建てられ、その当時は漢方薬店であった。出身は福建省で現在でも福建との繋がりは大変にしているという。

家の奥に台所がある。竈は多少の修復をしているが、100年前に家を建てたときのままである。石灰・漆喰・サトウキビの蜜を使って作られているため、熱には強いという。竈の天上部分には、煙が上に向かうような工夫がされており、当時の職人の技術によるものであるという。竈神の祭壇は、竈の上部に作られている (写真 2-21)。竈と竈神の祭壇の位置は東であり、その理由は竈を使うときに顔が東を向くことが大事であるという。現在、竈は1年に数回、祖先の命日など特別な料理を作るときに使用する。日常の調理は、竈の向かい側、西側に置かれたガスコンロを使用している。使用頻度に関わりなく、竈が主、ガスコンロは副であり、主のものは東を向くことが大事であるという。

祭壇には香炉と燭台二つ、花瓶、瓶が三つ置かれている。神牌は当初から置かれていないという。祭壇に置かれた香炉は赤一色であり、奥にある三つの瓶にも蓋の上から赤い紙が巻かれている。三つの瓶に入っているものは、塩・米・水であり昔から変わっていない。中身の塩と米はほとんど変えず、水は蒸発した分を足すのみである。昨年瓶が割れたために新しくしたが、基本的には上に巻かれた赤い紙も捨てることはなく、紙を変える場合は上に重ねていくという。

竈神の儀礼では、お茶とお酒を3杯ずつと檳榔、そして時々ぜんざいとおこわも供えている。竈神の好物はお茶と水飴で、水飴は近年供えるようになったという。

竈神の役割は、家族の保護と生活の安定であり、家族や兄弟が仲良く、出世できているのは

竈神のおかげであるという。

#### 事例④ クアン・タン (Quan Thang) 邸

現在、5,6,7,8代が一緒に暮らしている。祖先は中国福建省出身である。築300年の家屋は、現在ホイアン旧市街の観光の一つとなっている。

入り口を入るとすぐに、両側に部屋がある。その先に祖先の祭壇が上部に作られている。少し先に進むと、左右の壁に祭壇が設置され、東側の祭壇には「福德正神 司命灶君」の文字が記されている。西側の祭壇には「天官賜福」の文字が記されている。この二つの祭壇が置かれた経緯はわからないという。

台所は家屋の1番奥に作られている。昔の竈は自然方位の東の壁に作り付けてあり、三つ口の竈と北側に低い一つ口の竈がある。どちらの竈も現在は使用していない。祭壇は三つ口竈の上部に設置されている(写真2-22)。赤い木で作られた祭壇には、同じく赤い木の板に金色で「定福灶君」と書かれた神牌が中央に置かれ、燭台二つ、小さなカップが三つ置かれている。6代目にあたる女性によると、竈神の祭壇は家を作ったときからあり、祭壇の位置は家主のあう方向を専門家に頼んでみてもらうという。

現在使用している台所は、西側の奥に作られている。手前に小さな竈があり、奥にガスコンロが置かれているが、竈神を祀るものは何も置かれていない。

竈神の儀礼では、マーと甘いものを供えている。マーは市場に売られている竈神セット(竈神の紙服などが入っている)を購入している。

#### 事例⑤ ドック・アン (Đức An) 邸

家主は現在6代目、漢方薬店を営んでいる。祖先はベトナム人である。店の1番奥に台所があり、昔の竈が置かれている(写真2-23)。作り付けの三つ口竈は、50年程前まで使用しており、当時のままのかたちで残している。作り付け竈を作ったのは、当時のホイアンの影響であろうという。竈の手前にガスコンロが置かれている。竈神の祭壇は、昔の竈の上部に箱型の棚が設置され、そのなかで祀られている。昔の竈も祭壇も東側の壁に作られている。東側に西向きに竈を作ることで、人の顔が東を向くようにするのだという。

約150年前から使われているという真っ赤に塗られた祭壇には、「定福灶君」の神牌が中央に祀られ、香炉、ランプ二つ、花瓶、果物が置かれている。神牌は新しくしたという。祭壇のなかは、東に花瓶、西に果物(果物は山を表現)を置くのが昔からの決まりであるという。儀礼のときも普段と同じように果物を供えている。

屋外には井戸が作られ、その上に香炉が置かれている。井戸にも神がいるため、井戸の上には何も置いてはいけないという。



写真 2-19 事例①  
書法邸の竈と竈神



写真 2-20 事例②  
チャン・ティ邸の竈と竈神



写真 2-21 事例③  
安順邸の竈と竈神



写真 2-22 事例④  
クアン・タン邸の竈と竈神



写真 2-23 事例⑤  
ドック・アン邸の竈と竈神



写真 2-24 貿易陶磁博物館

#### (4) 風水思想に基づく竈と竈神

上記の事例を整理するとホイアンの竈神を祀る位置について以下の3点の特徴が明らかになった。①どの家も竈神は、現在は使用されていない昔の竈が置かれている場所で祀られている。そして、現在の台所（ガスコンロが置かれた場所）では祀られていない。②昔の竈と竈神祭壇は、すべて自然方位の東側に作られている（図 2-2）。③祭壇や神牌、香炉などには、必ず赤色が使われている。

竈神の祭壇の位置について、事例 4 では祭壇は家主の合う方角と述べているが、実際は他の家と同様に東に置かれている。竈と祭壇は今回とりあげた事例以外にも三つの家屋と貿易陶磁博物館の奥に残された竈も東に置かれている。その上には、線香が立てられている（写真 2-24）。チャン・ティ・レ・スアンの記したような南または西に竈を置く家はなかったが、事例 2 と事例 4 では、東側にある竈の中央ではなく南側に置かれていた。また、東に竈と祭壇を置くことについて、チャン・ティ・レ・スアンは竈が西を向くようにと記しているのに対し、聞き取りでは、人や竈が東を向くことが大事であるということが聞かれた。東に置かれていることは同じでもその理由に違いがある。竈と竈神が意識的に東に置かれていることは明らかになったが、なぜ東に置かなければならないのか、人が東を向くことが重要なのかその理由は聞き取りからは得られなかった。

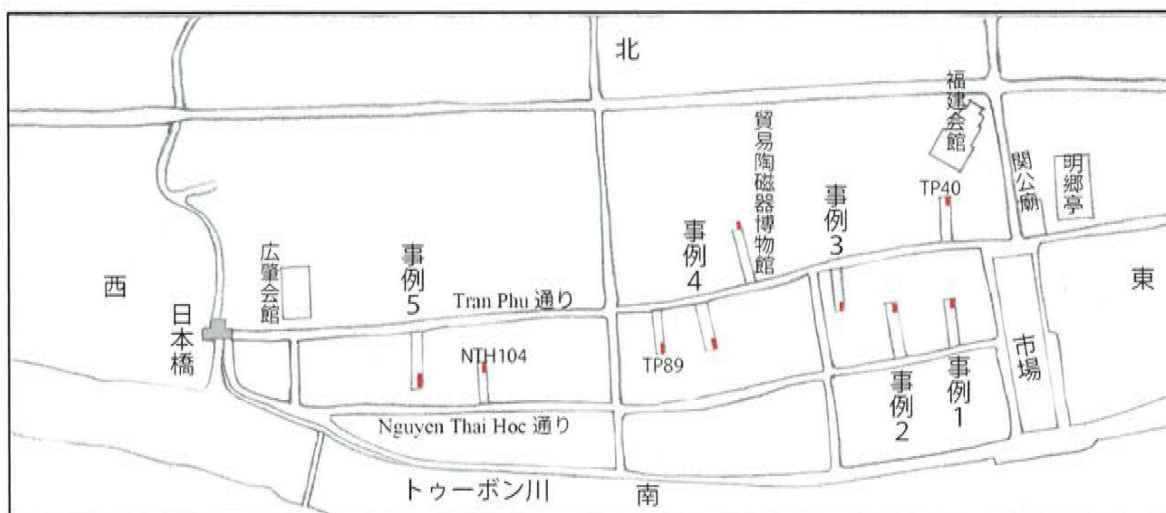


図 2-2 ホイアン旧市街 事例 1-5、貿易陶磁器博物館の竈と竈神の祭壇の方位

#### ・風水思想と竈神の関係

ここから少し竈と竈神の祭壇を東に置くことについて考えてみたい。まず、「東厨司命灶君」という竈神の尊称について、チャン・ゴック・テムとフィン・ゴック・チャンが記した八卦や竈神と火との関わりからみていく。「東厨司命灶君」の「司命」とは、文字通り命を司するという意味である。中国において竈神が司命と関わりをもつことについては、晋の葛洪の著書『抱朴子』に記されている<sup>19</sup>（葛洪 本田濟訳注 1990:123-124）。「東厨」については、本研究で取り上げた現地収集資料にも「東厨」の文字はいくつか記され、『道蔵』<sup>20</sup>にも「東厨司命燈儀」が収められている。しかし、なぜ東厨なのか「東」と「厨房」の関わりにはどのような意味があるのかは不明であり、道教大辞典に「東厨者庖厨也。」（中国道教協会、苏州道教協会 1994:356）と記されている以外に、現時点では確認できていない。可能性として、「司命」が泰山信仰と結びつき、泰山府君を司命神とする俗信があること（稲畑 1994:237）、泰山が国家の崇祀する五岳の筆頭として東方に配していることから（澤田 1994:365-366）、竈神が東岳の泰山と結びつき東に祀られるようになったと考えられる。事例 2 では、神牌に「東厨 定福灶君」と書かれており、東厨司命灶君として東に祀られていると考えることもできる。

次に八卦と火との関わりからみていきたい。1820 年のベトナム南部の地志『嘉定通志』<sup>21</sup>に

<sup>19</sup> 『抱朴子』内篇卷六、微旨篇「天地に過ちを司る神があり、人の犯した罪の軽重に随ってその算（命数）を奪う。算がへると、その人は貧乏したり、病気になったり、たびたび心配事に遇う。算が尽きれば人は死ぬ。算を奪われるべき罪状は数百条あり、一々述べきれない。またこうも言う、（省略）そのほか晦日の夜、竈の神もまた天に昇って人の罪状を報告する。罪の大きな者に対しては紀を奪う。紀とは三百日である。罪の小さな者に対しては算を奪う。算とは三日である。」

<sup>20</sup> 『道蔵』とは、道教典籍を組織的に収集整理した一大叢書である（尾崎 1999:455-456）。その『道蔵』「洞真部、威儀類」に「東厨司命燈儀」があり、東厨司命の役割や禁忌、儀礼などが記載されている。

<sup>21</sup> 1820 年鄭懷徳撰、広南朝時代から阮朝初期にかけてのコーチシナ全域（現ベトナム南部）の地方志（藤原利一郎 1975:707-708）。



は、「又祀灶神、左右畫二男形、中間一女形、亦象離火二陽中以一陰爲主之義、」と、竈神が八卦の火と結びつけられて記されている。八卦の「離」☲は火をあらわし、後天八卦では南に、先天八卦では東に位置する。竈神を男神二柱・女神一柱の二陽一陰とする八卦からみれば、先天八卦を用いた方位であるということが出来る。しかし中国では、基本的に後天八卦を用いて風水の判断をしてきたことを考えると、ベトナムの風水が先天八卦を使用して方位を決めていたかという点には疑問が残る。

五行思想からみると、火は南を位置し赤色で表される。ホイアンの竈神祭壇や神牌などに赤色が使用されているのは、五行思想の影響とも考えられる。また、相生の関係「木生火」でみれば、木の位置である東に竈を置くことも考えられる。トアン・アインは、送神儀礼で供える竈神の紙の帽子（冠）は、毎年五行に従って色が決まっていると記しており（Toan Anh 1997 (1967): 115）、五行八卦が竈神祭祀に大きく影響をしていることは確かである。

本節では、ホイアン旧市街に残る古い竈とそこで祀られる竈神をみてきた。竈神は、自然方位の東側に置かれた竈の場所で祀られ続けている。そのことから意識的に東という方位に祀ることを重要としてきたことが明らかになった。特にホイアンの旧市街の人々が竈と火の関係性を重視し、中国の陰陽五行思想のなかでも八卦や風水思想を取り入れながら、ベトナムの三柱の竈神を祀ってきたということが出来るのではないだろうか。

#### 第4節 まとめ —ベトナムの竈神の地域性—

各節でそれぞれの竈神を祀る実態をみてきた。地域性には、それを生み出すさまざまな歴史的事象があり、それらが複雑に関係しながら竈神の祀り方の特徴を作り上げてきたことが明らかになった。ここでは、第2章のまとめとして、ベトナムの竈神の全体から地域差というものを捉えていきたい。

ベトナム全域の竈神をみると、祀り方に明確な違いがある。その一つは、竈神を祀る場所である。祖先の祭壇で祀られる北部地域と台所の竈神の祭壇で祀られる中南部地域、この差は1954年の南北分断という歴史と北部ベトナムの社会政策が影響していることは前述してきた。しかし、その他にも地域となる要因として中国の影響を取り入れてきた時代と地域とその内容が考えられる。

北部地域の竈神が祖先の祭壇に祀られるのは、社会政策の理由だけではなく、土公との混淆が大きく影響をしている。張によれば土公は中国でも時代とともに変遷し、特に明清時代以来、世俗化し土地神と同一視されることとなり、現在は土地公（福德正神）に取り込まれているという（張 2014:11,52-64）。北部地域では、土公という中国の信仰を取り入れた。土地公（または福德正神）は、北部地域や中南部地域でも祀られており、土公とは区別されている。この土公がいつ頃ベトナム北部に入ってきたのかはわからない。土公という名称やフエ地域にも伝わっていることから考えられるのは、ベトナムが中部へと領土を拡大する以前のベトナム北部地域の時代、明の強い影響を受けていた14-15世紀、もしくはもっと古い時代の可能性も考えられる。しかし、その土公の役割は北部地域の土地神として位置付けられていた。そのなかで竈神と混淆し、習合されていった。現在、竈神が祖先の祭壇で祀られる要因は、土公の役割との習合が大きい。なぜなら竈神（土公）が祖先の祭壇で祀られる理由は、悪霊の敷地内、屋内へ



の侵入を防ぎ、良い祖先の霊だけを招き入れるためであり、そして家族を保護する役割を担うためである。つまり総合的な強大な力を持った神となったのであり、竈神と土公との習合は北部地域の竈神の特徴として形成された。

一方、中南部地域には土公の信仰は伝わっておらず、竈神との混淆もない。中南部地域における中国からの土地神の影響は、前述した土地公（福德正神）であり、また財神と一緒に祀られるオンディア（翁地）である。中南部地域の竈神のなかで中国の影響が大きくみられるのは、神牌「定福灶君」とマーである。福德正神やオンディアもあわせて17世紀末、明末清初に中部から南部地域にかけて移民として入ってきた明の遺臣やその関係の人々が持ち込んだものであると考えられる。これらは北部地域にはほとんど影響を与えていない。その理由は、当時のベトナムがダンジョン・ダンゴアイとして分裂していたこと、そのうち統一はされたが、フランスの支配や再び南北が分断し戦争が行なわれていたことなどが関係すると思われる。

中南部では、竈神の祭具に中国の影響が強くみられるが、中国の竈神を信仰しているわけではない。実際にはベトナムの三柱の竈神を祀り信仰している。それは、竈神のマーセットの中身に三柱分のマーや蠟燭が用意されていることにある。中南部地域の人々が中国の影響の取捨選択として祭具を取り入れ、自分たちの竈神を祀るために用いていることが、中南部地域の竈神の特徴といえる。

以上のように竈神に関する中国の影響は、ベトナム全域でみられるが、北部地域と中南部地域では中国からの影響を受ける時代や内容、その取り入れ方が異なる。そこにはまた、ベトナムの歴史的背景も大きく関わっていることも明らかになった。

しかし、ベトナムの竈神の祀り方には地域差があるものの、共通性もある。それは、男神二柱・女神一柱の三柱の竈神を信仰し、祀っていることである。人々の竈神に対する観念は家族を保護する重要な神であり、健康や幸福を祈念していることである。

最後に、ベトナムの多様性について少し述べておきたい。本章では北部地域と中南部地域という地域区分のもとで進めてきた。しかし、中南部地域のなかでも交易が盛んであったホイアンや南部地域のなかでもカンボジアとの国境に近い地域となるとそれぞれ異なる特徴がみられる。また、現在はハノイ市である旧ハータイ省も、ハノイと隣接するにもかかわらず竈神の祭壇が作られたり、ダウザウという言葉が知らなかったりと独自の特徴を有している。これはほんの一例であり、実際には、ベトナムの各地域で多様な特徴がある。

南部地域の竈神や土地神の信仰からわかることとして、北部地域の信仰が中部に伝わり、そこで先住民チャンパの信仰を融合して形成し、それが南部に伝わるとさらにクメールの信仰を取り入れ、そこに中国系移民の影響も包摂し形成された神を信仰していることである。このことは、ベトナムの人々がキン族以外の人々と接触し、その信仰をどのように取捨選択しながら受容して自分たちの信仰としてきたかを考える一端としてみることができる。

次にベトナム最後の王朝が置かれたフエ地域の人々の竈神を祀る儀礼についてみていきたい。

### 第3章 旧王都フエ地域の竈神の信仰と儀礼

フエ地域の竈神を祀る儀礼は、ベトナムの竈神のなかでも重要な特徴を持っている。それは、ベトナムの竈神や家の神としての古い形式をみることができる点と、フエ地域での独自の展開がみられる点にある。そこには、フエ地域が形成される歴史やその過程におけるさまざまな事象が関係していると考えられる。しかし、これまでの研究ではフエ地域の竈神儀礼は特徴については述べられてきたが、国内の他の地域との比較や分析、特徴が生み出される背景については言及されていない。

本章では、フエ地域の竈神がベトナムの古い儀礼の形式を継承する一方で独自に展開してきたことを、フエ地域の民間信仰とも関連させながら明らかにし、その背景にある歴史的な出来事や人々の暮らしなどから竈神に対する観念やフエ地域の人々にとって竈神とはどのような神かを考察する。フエ地域の特徴である神像と版画については次章以降で詳しく取り上げる。

#### 第1節 フエ地域の概況と竈神

##### (1) フエ地域の概要

フエ地域の自然地理とフエに王宮が置かれたことは、フエの人々が竈神を祀ることへの観念に関わるため、以下では関連する特徴の概要を述べていく。また、フエ地域の歴史については第1章で前述しているのでここでは省略する。

##### ・フエ地域の自然

フエ地域の自然地理については、グエン・ヴァン・ダンの資料（グエン 2012 : 481-482）をもとに記していく。ベトナム中部に位置し、北中部<sup>1</sup>の南端にあるフエ地域は、面積は狭いが地理的に非常に多様である。チュオンソン山脈が西側を塞ぐ形で聳え、東側に進むにつれて低くなっていく。それが三つの大河、フオン（香 Hương）河、ポー（Bồ）川、オーラウ（Ô Lâu）川の水源地域を作り出している。

フエ地域は北側にガン峠（Đèo Ngang）、南側にハイバン峠（海雲峠 Đèo Hải Vân）という自然の壁を持ち、それが国内で最も湿度が高く、東北の風とともにやってきて時に大洪水を引き起こす台風を伴う寒い雨季と、南西の風を受ける厳しい乾季という気候条件を生み出している。

フエ地域の地理的環境の特徴は、狭いけれども山や平野があり、デルタ、潟、砂地、海岸があり、それらがたくさんの川によって分断されていることである。これらの特徴は深さや広さが十分な港や船着場が持たず、今も昔もフエ地域に経済的利益をもたらしていない。しかし、この地理的環境は奇偉な風景や風水の要素を生み出し、軍人、政治家の思考を育てた（グエン 2012 : 481-482）。

そして、グエン・ヴァン・ダンは、「人々に自然の脅威に立ち向かって存続、発展していかなければならないという試練を与えることで、この地に住む人々の心理、文化を育ててきた」という（グエン 2012 : 482）。

<sup>1</sup> 文化・歴史的地域区分として、クアン・ビン（Quảng Bình）省からトゥアティエン・フエ省は北中部とよばれる。

## ・フェ王宮

人々の暮らしとも関わるフェ王宮については、主に中川武と早稲田大学アジア建築研究科による資料（中川 1996:59-78）を参照して記していく。

フェの王宮は、広南阮氏政権の第5代阮福湊が1687年 富春（Phú Xuân フースアン）社に新府を建てたことに始まるが、このときの富春城は現在の都城の東南隅にあたる。築城は風水に基づき、南に御屏山が相対する地を選定し、城壁に囲まれた王宮、その前に大池が掘られ、またフオン河上流の治水工事も行なわれた。第8代阮福潤のときに富春に再び首府が置かれ、規模が拡張され、「都城」とよばれるようになった。その後、富春は鄭氏の拠点となり、次に西山王朝の都となったが、広南阮氏の後裔、阮福映がフェを奪還しベトナム統一を果たし、1802年に越南阮王朝を樹立する。そして、都城の大規模な増築が始まった。

皇城の配置計画には、儒教や陰陽思想の影響がみられる。南面して前と左を陽（公的・男性的・優）、後と右を陰（私的・女性的・劣）として、太和殿（公的・前）に対して紫禁城（私的・後）、太廟（祖先・優・左）に対して世廟（子孫・劣・右）、世廟（公的・前）に対して奉先殿（私的・後）という配置構成の観念的体系が明確に現れている。（中川 1996:59-78）

## （2）調査地概要

本章での調査は主に、フェ市新市街と旧市街、フオンチャー（香茶 Hương Trà）県フオンホー（Hương Hồ）社<sup>2</sup>、フオンヴィン（Hương Vinh）社ディアリン（地霊 Địa Linh）村、フオンディエン（Phong Điền）県フオンホア（Phong Hòa）社フオックティック（Phước Tích）村、フーヴァン（Phú Vang）県マウタイ（Mậu Tài）社シン（Sinh）村で聞き取りを行なっている。フェ市については前述しているため、その他の調査地について簡単に記しておく。

フオンホー社は、フェ市から約4km 西南方向の場所に位置し、面積3375ha、農業地が2352.43hを占める、人口9,407人（2013年調べ<sup>3</sup>）の農業村である。フオックティック村は、フェ市の中心地から北西へ約30kmに位置し、焼締陶器を中心とした窯業生産が17世紀以前から行なわれていた村である（菊池・小野田 2011:136）。2008年に伝統的集落として国史跡に指定された。村の面積は約28ha、現在117件ほどの建物があり、そのなかに築200～100年を経過する木造民家の主屋が24軒ほどある（菊池 2010:184, 2011:5）。フオン河沿いにある二つの村、竈神の版画を生産する農業村シン村と竈神の神像を生産するディアリン村は、第4章・5章で詳述するためここでは省略する。

調査期間は、2012年から2018年にかけて毎年3～4週間ほど行なっている。

## （3）王宮で祀られる竈神

フェに王宮が置かれた時期、王宮の儀礼のなかに竈神を祀ることが記されている。その内容を少しみていきたい。

<sup>2</sup> 社 (Xã) は、広域の郷村。地方行政単位：県 huyện と村 thôn の中間、またはトン tổng(総) と村 làng の中間的な行政単位（川本邦衛編 2011:1840）。

<sup>3</sup> トゥアディエン・フェ省行政ホームページ <https://www.thuathienhue.gov.vn>（最終閲覧 2014.12.18）

### ①歴朝憲章類誌

潘輝注著の『歴朝憲章類誌』は、ベトナム歴代王朝の地誌・伝記・諸制度・書誌などを分類してまとめた政書である（和田 1999:349）。その卷之二十五の旗纛祭のなかに、

「竈君位 椀<sup>4</sup>十二品 齋盤一面 猪一首关 金銀酒油<sup>5</sup>」

と竈神への礼物が、「12品と豚一頭、金銀(紙)、酒、油」と記述されている。この旗纛祭では先師各位をはじめ、さまざまな神への礼物が記されている。そのなかで豚や金銀、美酒の有無が違いとして挙げられる。供物からみると竈神は重視されていることがわかる。最後の「油」は竈神以外には供えられておらず、竈神が火と関わることに基づいて用意されたと考えられる。また、竈神位の次に土公住宅位の礼物は以下に記されている。

「土公住宅位 禮物同上但無猪首」

竈君位と同じだが、豚(首)は供えられていない。竈神への豚の供犠と土公との相違、礼物のなかに油が記されていることに注目したい。

### ②欽定大南會典事例

阮朝内閣刊本『欽定大南會典事例』は、中国の『大清會典事例』にならって阮朝の諸制度を、事例を挙げて記録した阮朝内閣の欽定書である（和田 1999:193-194）。この卷九十三禮部二十五の會同廟の項に、その廟で祀られる神々が列挙され、そのなかに竈神の名が記されている。それによると、

「(梗概) 嘉隆二年(1803年)順安汎分に廟を建て、東西の兩班に土地龍神、五方河伯、水官、先師、土公、竈君、住宅等の神を祀る。功臣が毎年春秋二回、三牲と穀物を三盤に盛り廟を祀る。明命七年(1826年)、廟を朝山社東甲分へ移し、翌年王宮の會同廟の廟夫は三十名、王宮外の廟夫は二十名に決まる。また紹治四年(1844年)には王宮内の會同廟の廟夫が二十名になる。紹治六年には神々の列位が変わり、西側の建物に、先師、土公、竈君、住宅諸神の牌位を並べる。祭祀の禮品は嘉隆年の例と同じ。」<sup>6</sup>

とある。ここからわかることは、①フエの王宮内と阮王朝が管轄する王宮の外の2箇所<sup>7</sup>に會同廟があり、そこで竈神が祀られていたこと、②紹治6年に竈神は三間二厦の西の厦(房)で祀

<sup>4</sup>米編に宛(一文字)の漢字が書かれている。

<sup>5</sup>別の資料では「火由」(一文字)とあるが、おそらくは油であろう。

<sup>6</sup>阮朝内閣刊本『欽定大南會典事例』卷九十三禮部  
會同廟

嘉隆二年建廟于順安汎分○又準諸宮鎮各于西北郊立廟一座丙設祀案三中左二案通祀陽神諸位右一間隔以幃幄以祀陰神諸位東西兩班祀當境土地龍神五方河伯水官先師土公竈君住宅等神遞年春秋二仲祭功臣廟後遇丙日到祭禮用三牲黍盛三盤在京公堂官在外鎮官遵奉致祭○又準在京祠丞三員瀆夫十五率各鎮祠丞二員瀆夫十三率

明命七年移建廟于朝山社東甲分○八年議準在京會同廟夫三十名在外廟夫二十名

紹治四年議準省在經會同廟夫二十名○六年議準會同廟三間二厦正中間奉設牌位三一書上等陽神列位左一間設牌位二一書中等陽神列位一書下等陽神列位右一間隔以幃幕設牌位三一書上等陰神列位一書中等陰神列位一書下等

陰神列位東厦設牌位一書當境土地龍神五方河伯水官諸神列位西厦設牌位一書先師土公竈君住宅諸神列位遞年春秋二祭禮品均依嘉隆年例

られていたこと、③春と秋の2回儀礼が行なわれ、三牲が供えられていたことである。

1933年にカディエールが記したフエ京城の地名研究に會同廟 (Hội Đồng Miếu) が残されている。それによると、京城の北側に會同廟が建てられている。しかし、カディエールの説明には「44 會同廟：富春社 (村) の神々全体を祀る廟」とあるのみで、竈神は出てこない (Cadiere.L 1996(1933):19,43)。

また、歴朝憲章類誌で述べた「旗纛祭」については、欽定大南會典事例にも巻114、禮部、軍禮、春祭旗纛として記されている。しかし、鉄砲や弓弩に関わる神が列挙されるなかに竈神は登場していない。

この大南會典事例には、「會同廟」と同じ禮部二十五に「火神廟」の項がある。竈神が會同廟において合同で祀られるのに対して火神は一つの廟で祀られている。その記載によると、6月23日に儀礼をし、その際の禮物として黄牛、豕 (豚)、粢 (米粉で作った神前に供える餅) とある。火神がどのような役割を担う神であるのかはここからはわからないが、ここにも牛や豚など動物が供えられている。

### ③大南一統志

『大南一統志』は、中国の『大清一統志』の体裁にならって阮朝の国史館が編纂した漢文による官選の地誌である (和田：193)。『大南會典事例』の記述とほぼ同じ内容が『大南一統志』巻之一、京師、羣廟のなかの會同廟にも記されている<sup>7</sup>。『大南會典事例』の内容を簡略化して記したものである。また火神廟の記述についても同様である<sup>8</sup>。

『大南一統志』では、巻之一、承天府のなかで肇廟、興廟など数カ所で神厨が置かれていることが記載されている。先農壇で西北に神厨が置かれている以外は西側に神厨があり、その神厨の対として神倉が東側に建てられている<sup>9</sup>。神厨とは儀式を行なう際の料理を作る場所であり、儀式用の台所の設置には方角に決まりがあったことがわかる。しかし、この方位がどのような意味を持つのか現段階ではわからない。民間の竈神と関連させて考えていきたい。

また、王宮の儀礼ではないが、巻之九平定省の風俗に、

「臘月二十五日夜設香燈送竈神」

とある。ここから平定省では、竈神の儀礼が陰暦12月25日の夜に行なわれていたことがわか

<sup>7</sup> 原文：『大南一統志』巻之一、  
京師、羣廟 會同廟

在朝山社嘉隆二年建于順安汎明命七年移今所廟制三間二厦正中間設牌位一書上等陽神列位左一間設牌位二一書中等陽神列位一書下等陽神列位右一間隔以帷幕設牌位三一書上等陰神列位一書中等陰神列位一書下等陰神列位東厦設牌位一書當境土地龍神五方河伯水官諸神列位西厦設牌位一書先師土公竈君住宅諸神列位歲以春秋命地方官致祭

<sup>8</sup> 在香茶縣富春社明命六年建一座三間歲以六月二十三日地方官致祭

<sup>9</sup> 承天府

肇廟

靖皇帝皇后神龕歲五饗如太廟廟之前左右三面各砌墻短以属于北垣開洞門三短墻外東為神庫西為神厨廟之北垣左為集慶門右為衍慶門其南限墻左對集慶門者為元祉門右對衍慶門者為長祐門興廟

興祖孝康皇帝皇后神龕歲五饗如太廟廟之前左右三面別築磚墻前為病門左曰章慶門右曰毓慶門門外東為神庫西為神厨廟北垣左對顯祐門曰致祥門右對應祐門曰應祥門嘉隆初為



る。しかし、『大南一統志』に記された省のなかで、平定省以外には風俗の条に竈神の祭祀など関連する記載はない。19世紀末頃のこの時期は、フエ地域では王宮の影響を受けながら竈神は祀られていたはずであり、他の地域でも一般的に竈神は信仰されていたと思われる。竈神を祀り儀礼を行なうことが人々のあいだで普遍化しすぎていたために特に記す必要がなかったということも考えられるだろうか。

#### (4) 灶君経と疏文

フエの王宮の會同廟でさまざまな神とともに竈神を祀り、毎年春秋2回、三牲と穀物を三盤に盛って廟を祀ると記されていることは前述した。その際に用いられたと思われる経典と、またフエ地域で売られている疏文や竈神の祈禱師の所有する誦経について記しておきたい。

##### ① 翁寺の灶君経

フエには、翁寺 (Chùa Ông 関帝廟) で1909年に刻印された『灶王真経』(「竈王真経」)がある (Trần Đại Vinh 1995 : 84)。翁寺とは、『大南一統志』承天府・祠廟、関公祠の条文に、朝廷から銅の扁額を下賜されたことが記された<sup>10</sup>重要な寺である。翁寺で刻印された経典は、朝廷でも使用され、朝廷の役人が翁寺に寄付をして経典の版木を作らせていたという<sup>11</sup>。それによると、灶神は12月24日子の刻に上がり天上の朝廷に奏上するため、民間では23日に誠心、斎戒し見送りの礼拝をしなければならない。30日に灶神が戻るときには誠心でお迎えし、朝夕に家が繁栄し神が安らかにいられるように敬礼拝をする<sup>12</sup>と記されている (Trần Đại Vinh 1995 : 84)。阮朝期に規準がつくられ、朝廷で行なわれていた竈神儀礼が、民間のそれにも影響を与え、現在もなお継承されているといえる。

##### ② 竈神の疏文

疏文とは、儀礼の際に各種の神霊に対し読み上げられる公文形式の文書であり、そのなかに記されている神霊は、佛教系、道教系や聖母信仰系の神明、亡霊などに大別され、主に儀礼の専門家が使用し、たまに個人が祈安や年間の行事など一部の疏文を自分の家で行なう儀礼に用いることもある (末成 2012a : 588)。フエ地域の疏文については末成の詳細な調査があるため (末成 2012a)、ここでは竈神に関する疏文について少し触れておく。

##### ・ 祥光寺 (chùa tường quang) の疏文

祥光寺はチーラン (Chi Lăng : 芝陵) 通りにある。疏文は多くの種類が揃えられている。現在は機械による印刷だが、寺には版木が多く所蔵されていることから、以前は版木から印刷をしていたようである。しかし、寺の住職も住職の妻も版木のことや現在どこで疏文が印刷されているかなどについては全くわからないという。版木はインクのついた使用されたものだけでなく、彫っている途中のものや未使用のものなども山積みされている。

<sup>10</sup> 『大南一統志』承天府・祠廟に記された原文：関公祠 在縣地靈社。本朝明命十二年重修、賜銅匾額。嗣徳三年賜木匾金湘。

<sup>11</sup> 2013年チャン・ダイ・ヴィン氏のご教示による。

<sup>12</sup> 『灶君経』「竈王真経」に記された原文：十二月二十四日子皆。上奏 天曹。世人宜前於二十三日。虔誠齊供敬送。至三十日回位。各宜虔誠迎接

疏文には、竈神の他に土神、男性と女性の本命神などがある。そのなかにチャンパに対する疏文もあるが、これは決められた儀礼の日があるわけではなく、家族によって用いるのだという。男女の本命神の疏文は、陰暦1月9日の儀礼のときに準備するそれぞれのマーのセットと一緒にになっていることが多く、家レベルの儀礼で疏文が用いられている。

・竈神に関する疏文

竈神の疏文は、祥光寺だけでなく、ドンバー市場でも購入ができる。漢字のみが記されたものとベトナム語と一緒に書かれているものもある。北部地域の竈神の疏文と比べると簡易であり、方位の禁忌や各犯などの言葉は現れない(写真3-1)。

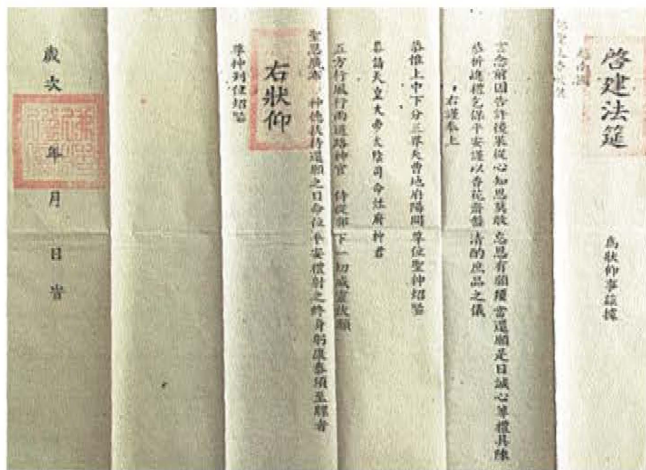


写真 3-1 祥光寺の竈神の疏文

啓建法筵  
越南国  
佛聖上香献供  
言念前因告許後果從心知恩莫敢  
忘恩有願須當還願是日誠心尊禮具陳  
恭祈進禮乞保平安謹以香花齋盤  
清酌庶品之儀  
右謹奉上  
恭惟上中下分三界天曹地府陽間  
尊位聖神昭鑒  
恭請天皇大帝太陰司命灶府神君  
五方行風行雨道路神官 侍從部下一切威靈伏願  
聖恩廣布 神德扶持還願之日命位平安禮射之終身躬康泰須至牒者  
右状仰  
尊神列位昭鑒

③ホー・ヴァン・イエム氏の竈神と『竈王日誦經(Kinh Nhật tụng Vua Táo)』

ホー・ヴァン・イエム (Hồ Văn Yêm) 氏の家はフエ市内にあり、その2階には大きな祭壇が置かれ祭壇側から見た左側に竈神が祀られた空間がある(写真3-2)。イエム氏は第4章で述べるが、竈神の神像の製作をチュン・ヴァン・ムオイ氏に依頼した人物である。西村はイエム氏について、風水を得意とする人と称している(西村 2012c:286)。

イエム氏は、十数年前に亡くなっており妻の話によると<sup>13</sup>、ある日突然に竈神がイエム氏の身体に入ってきたのだという。それから祀り方が変わり、イエム氏の家が竈神を祀る中心地となったそうである。30数年くらい前からだという。そのためイエム氏の家は竈神を祀ることが1番中心ではあるが、ヴィア



写真 3-2 ホー・ヴァン・イエム氏の竈神

<sup>13</sup> 2013年6月19日に聞き取りを行なった。

(Via: 信仰対象の聖誕) のときにはさまざまな人が訪れるという。イエム氏が亡くなった後は妻が引き継いで、竈神の儀礼などを行なっている。イエム氏の竈神の神像は、ムオイ氏が製作する特別なもので市場などでは購入できない。ムオイ氏から神像を受け取る前に家で儀礼をして、ムオイ氏の家でも儀礼をしてから神像を受け取り、家に持ち帰り再度儀礼をする。そして陰暦 12 月 22 日、竈神儀礼の前日にイエム氏の竈神を信仰している人々が取りに来るのだが、神像に決められた価格はなく気持ちを納めるのだという。

イエム氏が竈神の儀礼を行なうときに用いるのが、『竈王日誦経』である。現在、筆者の手元にある資料は、ディアリン村で竈神の神像を製作するムオイ氏がイエム氏から受け取った竈王日誦経である<sup>14</sup>。その内容については、大西が『竈神真経』解題』として書誌情報と内容を解説し、その全文が掲載されている。それによれば、『竈王日誦経』には保大 12 年 (1937) 7 月 15 日に重刊された『竈神真経国語演音』(9 葉) が挟み込まれ、本文は上下に別れ、上欄には漢文、下欄にはチューノム、それらの左にはベトナム語音がローマ字で併記されている (大西 2012a:399-400)。大西は『竈神真経国語演音』に竈神を祀るのは 12 月 23 日で竈神が天へ報告に行くのが 24 日とあること、本資料末尾にイエム氏が 22,23 日に祀ること、鯉を 3 匹用意することなどを記載していることから、かつてのフエでの竈神が時間をかけた規模の大きな行事であったと記している。イエム氏の妻の話によると『竈神真経国語演音』を儀礼の際に読み上げるが、イエム氏の竈神を信仰する人びとがその内容に従っているわけではない<sup>15</sup>。また、22 日に祀るのはイエム氏から渡された神像であり、フエ地域では 22 日から 23 日の日付が変わった直後に儀礼を行なう人が多く、その場合は 22 日に祀ることになる。また 23 日 24 日については上述した翁寺で 1909 年に刻印された『灶王真経』や、ハノイの玉山祠で出版された『乩正竈神経文』にも同様に記載があることから考えると、イエム氏やムオイ氏が所有する『竈王日誦経』に記された内容からフエ地域の竈神の規模が大きかったということは難しいだろう。しかし、どのような経緯でイエム氏が竈王日誦経を入手し、どう活用していたかは未詳である。

イエム氏の竈神を信仰する人々のための神像を製作しているムオイ氏については第 4 章で述べたい。

## 第 2 節 フエ地域の家レベルの年中行事と民間信仰

ここではフエ地域の民間信仰についてみていきたい。

### (1) フエ地域の年中行事

#### ① フエ地域の民間の年中行事 (表 3-1)

フエ地域の家レベルで行なわれる年中行事の一覧は以下のとおりである。

第 1 章で記したベトナムの年中行事と比較すると上記の年中行事の表から、1 月 8-9 日の新年仕事始めの儀礼、2 月と 8 月の土神儀礼、5 月 23 日 (23~31 日) の儀礼はフエ独自の特徴

<sup>14</sup> イエム氏の名前と住所、最後に Phung sao とあるためイエム氏が複写をして渡したことがわかる。

<sup>15</sup> 鯉を 3 匹用意することも最近のハノイや北部地域ではよくみられることであり、フエ地域ではほとんど行なわれず、イエム氏の妻は鯉を放生するのはそれぞれの考えによってと答えておりイエム氏の竈神を信仰するなかで強制されているわけではない。

であることがわかる。1885年のフランス侵攻によるフエ陥落（失守京都）による死者を祀る儀礼は、現在でも陰暦5月23日から1週間ほどの間に各家で門の前の道路の脇に祭壇を設けて儀礼を行っている。これは孤魂（cô hồn）儀礼とよばれるように、不慮の死により祀られずに浮遊している靈魂に対する鎮魂儀礼である。フエ京城内に陰魂廟も建てられている。土神儀礼と5月23日の儀礼はどちらも土地にまつわるものであることが注目される。ここでは、1月8-9日の新年の儀礼について述べたい。

表 3-1 フエ地域の家庭での年中行事（陰暦）

月	日	年中行事
1月	1日	元旦《Tết Nguyên Đán》
	3日	祖先の見送り儀礼《Cúng đưa》（2日～5日の間）
	8-9日	新年仕事始めの儀礼 本命神儀礼 《Cúng đầu năm (cúng bà)》 8日夜～9日朝にかけておこなう
2月		土神儀礼《Cúng Đất》 2月のある日、または8月
5月	5日	端午の節句《Tết đoan ngọ》
	23-31日	1885年フランス侵攻、フエ陥落（失守京都）に伴う死者を祀る儀礼 《Cô hồn》
7月	15日	盂蘭盆供養《Lễ Vu Lan (Lễ báo hiếu)》
8月		土神儀礼《Cúng Đất》 8月中のある日、または2月
	15日	中秋節《Tết Trung Thu》
10月		新嘗祭儀礼《Cúng cơm mới》 （または8月）日にちは家族やその年によって異なる
12月	23日	竈神送神儀礼《Tết ông Táo》
	30日	大晦日 竈神の戻る日、祖先を迎える儀礼、除夜儀礼 《Cúng giao thừa (đêm trừ tịch)》

出典：2014年聞き取りとフィン・ディン・ケット氏のご教示により筆者が作成

## ②新年儀礼（Cúng đầu năm）

この儀礼は、正月が終わり仕事を始めるときの儀礼である。多くは職人が自分たちの職業の祖先（始祖）が祀られる亭や廟などに赴いて、仕事始めの挨拶をする。例えば、ディアリン村のゴアトゥオン地区には左官の祖先神を祀る泥瓦祖堂（Miếu thờ ta nê）があり、フエ地域全体の左官組合が祭礼に訪れているという（地理情報収集班2012:65）。この地区には、次章で報告する竈神の神像を生産している人々がいるが、彼らは参拝には訪れていない。第5章で述べる竈神の版画を製作するシン村では、版画業に関わる人たちが陰暦



写真 3-3 新年儀礼 学科長室にて

1月9日に自分たちの村の亭に参拝し、仕事と家族の祈願をする。シン村については第5章で



述べていきたい。また、街では商売をしている人々が店の前に祭壇を用意し供物を供え儀礼を行っている様子を見ることが出来る。

大学の学科内でもこの新年儀礼を行なうところがある(写真3-3)。この学科では、フエ地域・中部地域の歴史や考古学を中心にチャンパ時代の調査を行なうことが多い。そのことが儀礼を行なう理由の一つになっているようである。祭壇は、写真の右側の窓の向こうにある御屏山を拝むように置かれている。南に位置する御屏山は、風水によるフエ王宮の築城でも重要な山である。その御屏山に向けて、大学の新年儀礼が行なわれている。この新年儀礼では学科長が代表して拝むが、年末の儀礼では祭壇いっぱい供物が並べられ教員一人一人が線香を持ち拝んでいく。

この新年儀礼の日は本命神の儀礼の日でもあり、人々は家の屋内に祭壇を設置し供物を用意し礼拝する。本命神については後述する。

## (2) フエ地域の家レベルの民間信仰

ここでは、竈神と関連する本命神と土神、アム(庵)について簡単に述べたい。

### ①本命神

本命神(タン・ボン・マン: *thần bôn mạng*)には、家主の男性を保護する神と女性(家主の妻)を保護する神がいる(写真3-4)。男性の本命神は、主屋にある祖先の祭壇の奥、高い位置に神棚(*tran thờ*)<sup>16</sup>を設けて祀っている(Huỳnh Đình Kết 1998:33)。この男性の本命神の祭壇をチャンオン(*trang ông*)<sup>17</sup>と呼ぶ。チャンオンには、「土公、先師、灶君」の三体が祀られる<sup>18</sup>(Trần Đại Vinh 1995:79-85)。チャンオンに祀られる竈神と台所で祀られる竈神は同じ神である<sup>19</sup>。しかし、台所で祀られる竈神は家族、特に子どもを保護する神であるが、チャンオンで祀られる竈神は家の主人だけを見守る神である<sup>20</sup>。

実際に男性の本命神を祀っている家では、祖先の祭壇の奥、中央の高い位置にチャンオンはあり、三つの香炉が置かれている。チャンオンはあっても、三つの香炉で何の神を祀っているかよく分からないという人もいる。

女性を保護する本命神の祭壇はチャンバー(*trang*



写真 3-4 男性の本命神(左)香炉三つ  
女性の本命神(右)

<sup>16</sup> フィン・ディン・ケットは *tran thờ* (Huỳnh Đình Kết 1998:33) と表しているが、チャン・ダイ・ヴィンは *Khám thờ* (Trần Đại Vinh 1995:79) と表現している。Tran は「棚」、本田氏の訳は「欄」(フィン・ディン・ケット 2005:213) であり、*khám* は「竈」である。どちらも木製の小さな祭壇を表す言葉である。

<sup>17</sup> チャン・ダイ・ヴィンは *trang ông* (女性は *trang bà*) と表記しているが、フィン・ディン・ケットは *tran ông, tran bà* としている。

<sup>18</sup> それぞれの正式名称は、「五方土公尊神、歴代先師尊神、東厨司命灶君」であり、順に、「土神、職業神、竈神」である。先師は家主である男性の職業を保護する神である(Trần Đại Vinh 1995:79-85)。

<sup>19</sup> 2013年、チャン・ダイ・ヴィン氏のご教示による。

<sup>20</sup> 2013年、フィン・ディン・ケット氏のご教示による。

bà) と呼ばれ、主屋の東側の高い位置に置かれている (Trần Đại Vinh 1995:85-86)。チャンパーに祀られる神は、西宮王母本命聖徳先婆 (Tây cung vương mẫu bản mạng thánh đức tiên bà) という女神であり<sup>21</sup>、成人してから 60 歳までの女性がこの西宮王母を祀る (Trần Đại Vinh 1995:85-86)。筆者の調査でもチャンパーには西宮王母の文字が記された神画が祀られ、祭具店でも西宮王母と書かれた神画が多く売られていた。チャンパーも男性の本命神と同じく、保護するのは家主の妻のみであり、そのため 60 歳を過ぎると、本命神を息子の妻 (嫁) へ引き渡す。

しかし、女性の本命神の祀り方には、近年新しい変化がみられる。一つは男性の本命神を祀る家が減っているのに対して、本命神を祀る女性は増えていることである。姑が 60 歳を過ぎて嫁に引き渡す前に、自分たち夫婦の部屋に密かに祭壇を置いている場合もある。また、姑と嫁の二つの祭壇が並んで置かれている場合もある。二つ目は、本命神の役割が女性の財神となっていることである。命を保護する役割から現代の現実的な生活における保護として財神のご利益を願うというのであろうか。若い女性たちが結婚後に本命神を祀ることが増えているという。



写真 3-5 本命神の儀礼 (陰暦 1 月 9 日 0 時)

このチャンオン・チャンパーで祀られる男性と女性の本命神の儀礼は、一年に一度、陰暦 1 月 8 日の夜から 9 日にかけて行なわれる。8 日の夜に供物などの準備をし、9 日の 0 時になるとすぐに儀礼を行なうのである (写真 3-5)。

## ②土神 (Thần Đất)<sup>22</sup>

陰暦 2 月または 8 月の吉日に家の敷地のなか (屋外) で儀礼が行なわれる。この土神儀礼では、屋外の井戸神や門神などの神、自分たちの土地の以前の住人 (前主) やその土地で戦死した兵士、行き場がなくさまよっている霊、魔鬼、そしてフエ地域にもともといたチャンパーの人々や少数民族の人々、竈神など屋内で祀られる神なども区別することなく全てを祀り、そして敬意と感謝をもって供養を行なうのが土神への儀礼であるという<sup>23</sup>。

儀礼は、チャン・ダイ・ヴィンによると、三つの机を用意し、各机には線香、ランプ、果物、檳榔、キンマ、酒、金銀紙を置く。上の机には、鶏一羽とおこわ、ぜんざい、中の机には、大きな肉などのごちそう、下の机には、おかゆや米、蒸したキャッサバが置かれる。また、チャム人への特別な供物として、茹でた野菜と芋類、魚とエビの串焼きが置かれる (Trần Đại Vinh 1995:80-82)。実際には、フエ地域の人々は二つの机 (上の机と下の机) を用意して供物を並べて、儀礼を行なうことが多い。この儀礼は必ず屋外で行なわれる。また、この儀礼のときには鶏の足を使った占いをする。

<sup>21</sup> フィン・ディン・ケットは女性の本命神は九天玄女 (Cửu Thiên Huyền Nữ) としている (Huỳnh Đình Kết 1998:38)。ベトナムの九天玄女信仰に関して、大西の詳しい研究がある (大西 2012b)。

<sup>22</sup> thần đất は土地神と訳すこともできるが、ベトナムの他の土地神と区別するため、「土神」としている。

<sup>23</sup> チャン・ダイ・ヴィン氏 2013 年、フィン・ディン・ケット氏 2013 年のご教示による。



この非常に多くのご馳走を供える土神儀礼の根底にあるのは、土地に関わる神や亡者に対する鎮魂であり、特にチャム人に特別な供物を用意するのは、フエの土地を奪われたチャム人たちが引き起こす祟りを恐れ、祟りからくる災いを回避するためであろう。またはその力を自分たちの味方につけるとも考えられる。

この儀礼が屋外で行なわれることは、5月23～31日の失守京都による孤魂の儀礼が門の外で行なわれることとの対比からみても家の敷地で祀ることに意味を持つといえる。

### ③アム（庵 Am）

アム（庵）についてフィン・ディン・ケットによると、茅や竹あるいは簡単なもので作られた小さな家で、何らかの亡霊、家族やゾンホ（血縁親族集団）のパーコー（婆姑）の類を祀るもの。よく家の畑や三叉路、死者のあった場所のすぐ近くなどに建てられるとある（フィン 2005:212-213）。アムは家の敷地にも建てられている。このアムは、ベトナム全域で見られるが、そのなかでもフエ地域では屋外に庵を建てている家が非常に多くあり、また、複数の庵が建てられているという特徴がある。家の敷地内に建てられたアムについて、チャン・ダイ・ヴィンは、庭に一つから三つほどの小さなアムが建てられ、その一つは生前よくない行ないをして亡くなった男性、二つ目は生前よくない行ないをして亡くなった女性、三つ目は家族のなかで普通でない死に方をした亡霊、または家の敷地に潜む亡霊を祀るという（Trần Đại Vinh 1995:97）。未成の調査によると、アムが置かれるのは屋外（屋敷の内）、集落の内、村の内であり、祀られているのは親族の霊、他人の霊、管理者としての神霊に大別できるという。また、神霊は主に台座型に祀られるのに対して、人の霊は家型に祀られる傾向がある（未成 2002:40-52）。



写真 3-6 屋外に建てられた二つのアム

筆者のわずかな調査でも、アムはさまざまな理由で建てられている。前主が祀られているだけでなく、家族のなかで幼くして亡くなった女性や敷地内での戦死者、チャンパを祀ることもある。また、家に災難が続いたため古い師にみてもらいアムを建てたという話も聞かれる。時代を超えて代々、自分たちが暮らす家の敷地内の土地に住まう霊魂に対して、土地を守り家族を守るために建てられたものである（写真 3-6）。

## 第3節 竈神を祀る儀礼の実態

ここでは、まず竈神を祀る具体的な二つの事例を取り上げ、その後で項目ごとに整理しながらフエ地域の竈神の信仰と祭祀について述べていきたい。

### （1）竈神を祀る実態

・事例1：フィン・ディン・ケット（Huỳnh Đình Kết）氏（フッオンホー社）

フィン・ディン・ケット氏は元フエ民間文化博物館館長であり、フエの民間信仰研究者であ

る。年齢は62歳（2016年）、3人の子どもは独立して妻と3人暮らしである<sup>24</sup>。1981年に建てられた現在の家屋は、主屋の中央に祖先の祭壇が置かれ、主屋の左側に付属屋があり、その奥に台所がある（図3-1）。

ガスコンロの置かれた壁の上部に竈神の祭壇はあり、香炉、オイルランプ2つ、花瓶、果物皿、水の入ったコップ、竈神の神像が置かれている。祭壇は家主の生まれ年で方位が決まり、間違った方位に祀ることは避けなければならないという。

ケット氏の家では1999年からガスコンロを使用している。1981年に家を建て直してから1999年まで鉄の五徳を使用し、1981年以前は市場で購入した土製支脚も使用していた。自分で土製支脚を作ることはなかったという。現在の家屋になり、祭壇に小さな土製の神像を置くようになった。その土製の神像は1年に1度、竈神の儀礼で新しいものに交換する。一般的な儀礼の供物は、おこわ、バナナ、果物、花である。鶏は土神への供犠であるため、竈神には供えない。その他、紙銭と竈神版画、アオビン（áo Binh 竈神の紙の服）も供えている。ケット氏の家詳しい儀礼については後述する。

竈神は親しみのある神で家族の生活を守り、病気になったときや、女性が子どもを産むときには助けてもらう。特に子どもの命を保護する役割があり、0歳から10歳までの子どもは病気にかかりやすいため、子どもを竈神に預ける儀礼をしてきた。家主が子どもの名前・生年月日を書いた紙を神像の下に置いて、竈神に祈念する。そして、子どもが10歳になり、丈夫に育つことができたなら、子どもを自分たちのもとに戻すための儀礼を行なう。供物を供え、竈神に感謝を伝えて神像の下に置いていた紙を取り出す。最近ではほとんどこの儀礼は行なわれないが、以前は多くの家庭で行なわれていたという。

#### ・事例2：レ・チョン・ダオ（Lê Trọng Đào）氏（フォックティック村）

レ・チョン・ダオ氏は74歳（2016年）、妻と子どもの3人暮らし。元教師。築100年以上の家屋は、主屋の左側に付属屋が建てられ<sup>25</sup>、その付属屋に台所の空間がある。

台所は建物の奥、人から見えにくい場所に作るという。最初の台所は、地炉で土製支脚を置いて煮炊きをしていたが、1950年には立って使う台の上に炉が作られた。ここでは便宜上、「台付きの炉」としておく。その台付きの炉に置かれた、五徳やオイルコンロ（bếp dầu）を使用するようになった。現在はその台付きの炉では調理をしておらず、台のみが残されている。1980年代に使い始めたというガスコンロは、昔の炉とは別の場所に置かれている。

1950年頃まで土製支脚を使用していたときは、各家で作っていた。自分たちで土を捏ね、成形した後、それぞれの土製支脚を持ち寄り、村の窯を使って近所の人たちと一緒に焼成していた。しかし、土製支脚は壊れやすいため鉄の五徳に変えたという。

ダオ氏の家竈神の祭壇は、昔の台付きの炉、現在は台のみが残された場所の上部に作られている（写真3-7）。それは、祭壇を設置する方位が重要だからであるという。家主の方位によ

<sup>24</sup> フィン・ディン・ケット氏は2017年に死去された。現在の状況は確認できていない。家族構成は2016年時点でのものである。

<sup>25</sup> ダオ氏の家屋はフォックティック村の伝統家屋であり、奈良文化財研究所と昭和女子大学国際文化研究所紀要からそれぞれ『フォックティック村集落調査報告書』が出されている。その中のNo167 Le Trong Dao 邸として建造物について詳細な報告がされている（奈良文化財研究所2011:104-105）。



って決まるという祭壇は、ダオ氏の父親が占い師にみてもらいに「東東北」（16 方位でいうところの「東北東」）の位置に置くようになったという。しかし、この場合の方位は実際の自然方位とは異なるため、後述する。祭壇には普段は、香炉、花瓶、花、水の入ったコップ、朔望や儀礼では、果物や檳榔とキンマが置かれ、香炉の前に竈神の神像とその下に版画が置かれている。漆が塗られた三柱を象った神像である。ダオ氏が子どもの頃から小型の竈神神像はあったという。毎年、竈神儀礼のときに古い神像を見送り、新しいものに交換している。竈神の禁忌は特にないが、土製支脚や五徳、焜炉の前に水を置いてはいけないという。



写真 3-7 レ・チョン・ダオ氏の竈神の祭壇

写真左：竈神の祭壇(拡大)

写真右：昔の炉と竈神(左)現在の台所(右)

また、祖先の祭壇の上部には主灶（Chú Táo）が祀られている。主灶は、男性の本命神三柱の一つである。本命神は三神であるため三つの香炉が置かれている（写真 3-8）。ダオ氏によると、主灶としての竈神も台所で祀られる竈神も役割は同じであり、その役割はふつうの人（に近い存在の神）であり、全体的な神で善を導く神である。家のなかのことを全部見ており、送神儀礼の日に天に上り玉皇上帝に報告する役割があるという。

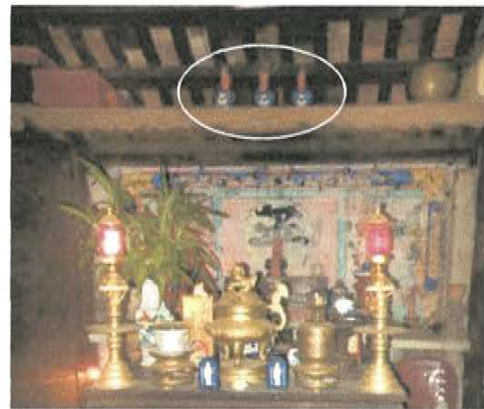


写真 3-8 レ・チョン・ダオ氏の  
本命神(上)祖先の祭壇(下)

以下では、聞き取りで得た内容を項目ごとに整理してみたい。

#### ・竈神の祭壇

フエ地域では、祭壇は台所空間の壁の上部に設置されている。そこには竈神の小型の神像が祀られている。この神像は現在、フエ地域のディアリン村で生産されているものである。第5章で詳しく述べるが、フエ地域でのみ用いられる竈神の神体であり、毎年竈神の儀礼で新旧の交換が行なわれている。また、その神像とともに竈神の版画も祀られる。この版画もまたフエ地域のシン村で生産され、ほぼフエ地域で流通している。版画は1年間祭壇で祀り儀礼の日に燃やす場合と、他の地域のマーと同様に儀礼の日に祭壇に供えた後ですぐに燃やす場合があり、家によって違いがある。

祭壇には、最もシンプルな場合は小型の神像と香炉が一つ置かれている。神像と香炉以外に

は、ランプや蝋燭、また水が置かれているが、全体的に簡素である。毎月の朔望に線香を立てて拝む人も多い。

フエ地域では、台所や竈神の祭壇の方位は重要であり、空間配置にも特徴がみられるため、(3) 家屋と台所と竈神の方位で詳しく述べる。

#### ・竈神の神体

調査を行なった家では、キリスト教徒以外の家のどの家でも祭壇に竈神の神像が置かれている。そのほとんどは小型の土製の神像であり、多くは竈神三柱を象ったものである。そのなかで、わずかに土製支脚を神体として祀っている家もある。

竈神の神体の変遷については第5章で詳しく述べるため、ここではどのような神体が祀られていたかを簡単に記しておく。フエ地域では、土製支脚を用いて調理をしていたときには、土製支脚が竈神であり、実用品そのものが神として祀られていた。そして土製支脚を実際に使用しなくなっても、しばらくは炉に置いて火を入れて竈神として祀っていた。その後、小型の神像を祀るようになったのだが、その契機としてケット氏の述べたように、台所を新たに作り直して地炉から台付きの炉に変えたときに、壁の上段に祭壇を設置して小型の神像を祀る家も多くあった。

フォックティック村では他の村とは少し異なり、古くから小型の神像が作られていた。そのため、人々は土製支脚を使用していたときから小型の神像を神体として祀っていたという。おそらく、窯業村であったことが関連していると思われる。

#### ・竈神の役割と竈神に対する観念

フエ地域の人々にとって竈神は基本的には、家族を見守る優しい神である。特に子どもに対して保護する役割が大きい。例えば、子どもが泣き止まないとき、特に夜泣きをするときには竈神に線香をあげると泣き止むという。また、子どもが病気になったときには竈神の前で祈ると治ると信じている人もいる。前述したようにケット氏は、竈神が子どもの命を預かる役割を担っていると語っている。この子どもの保護については、南部地域でも同様に竈神が子どもの司命神としての役割を持つことが記されている (Le Trung Vũ 2003(1993):45-47, Do Lam Chi Lan 1998:190)。しかし、第1章でも記したように、子どもの保護に関しては、南部地域では竈神へのお礼参りをしなければ怒って子どもへの災厄があるのに対して、フエ地域ではそのような話は聞かれず、子どもに対して竈神の役割は、命の保護である。

しかし、竈神は優しく保護するだけではなく、信じて祀れば優しい神だが信じないと怖い神になると語る人もいる。今は祀っているため竈神が温かく満足した生活を家族に与えてくれているのだという。また祀らないと心配だと話す人もいる。そして、新築や改築で新しい家に入るときには、竈神を家に入れる日時が大切となる。今でも多くの人が自分で暦から調べたり、占い師 (thầy bói, xem bói) などに頼んだりして良い日を選んでいく。間違った方位に祀ることは避けなければならない、もし家族に不幸が続いたり災難が起きたりすると竈神の方位を占い師にみてもらおうという話も聞かれる。竈神は基本的には優しい神であるが、無条件に家族を保護する神ではないことがわかる。



## (2) 竈神儀礼と神像の新旧交換

### ・事例3 フィン・ディン・ケット家の送神儀礼 (写真3-9)

陰暦12月23日の送神儀礼の時間は家によってさまざまであるが、ケット氏の家では陽が落ち始める少し前に行なう。儀礼を行なうのは、家主であるケット氏である。流れは次の通りである。①1年間祭壇で祀っていた古い竈神の神像や花などを祭壇から降ろして、新しい神像や供物を祭壇に置く。供物は、バナナ一房、花、茹でた豚肉、おこわ、水、金銀紙、紙銭、竈神の版画である。②祖先の祭壇に送神儀礼のあいさつをする。内容は以下のとおりである。(i) 当日の年月日:「本日は(陰暦)2012年12月23日です。」(ii) 夫婦の名前(子どもたちは独立して家族を持っているため夫婦の名前のみ):「わたしは□です、妻は○です。」(iii)「これから竈神を天に送る儀礼をします。」③次に、家の外に出て敷地内の井戸の神、門神と庵に祀られている神へあいさつをして、台所へ向かう。④竈神の祭壇のランプを灯し、新しい線香に火をつけ、祭壇に向かい、「新年からの1年間をどうかお守りください」と祈願する。⑤家のなかで竈神儀礼が終わると、1年間祀っていた神像や花、線香の残りや香炉の砂などを持って、家の近くの三叉路に置いてマーを燃やし儀礼をする。この三叉路は、チャン・ダイ・ヴィンの記した大きな木の根元や廟の一角(Trần Đại Vinh 1995:85)と同じ役割の場所である。⑥家に戻り、祭壇に供えた供物を降ろし、家族(夫婦)で共食して終わる。

ケット氏の家では、竈神の供物に基本的には肉(鶏や豚など)は供えない。今回は、筆者が調査に来たこと、その後に共食するために肉の供物も用意したのである。その際も鶏を供えることはしないので、茹でた豚肉が供えられた。



写真 3-9 ケット氏の竈神儀礼 家のなか竈神祭壇(左) 竈神の見送り(中) 供物(右)

### ・供物

どの家庭の供物も非常にシンプルである。果物はほとんどがバナナであり、花、おこわ、ぜんざい。そして肉類、特に鶏は供えない。鶏は土神に供えるものであると考える人が多い。マーも北部とも中南部とも異なり、市場に用意される竈神の儀礼セットのほとんどは小型の神像とシン村で生産される竈神の版画、そして竈神の服、アオビン(áo Binh)である。北部地域の立体的な竈神のマーも市場には売られているが非常に少なく、購入者もわずかである。また紙銭も用意はするが、量は少ない。